

菅江真澄資料センター

真 澄 研 究

17号

諸般に亘る博識を辿って

—菅江真澄随筆連想—……………新 野 直 吉 1

講演記録

方言と昔話——内田武志の軌跡 I ……………石 井 正 己 13

菅江真澄と秋田のジオパーク……………永 井 登志樹 37

平成25年3月

秋田県立博物館

諸般に亘る博識を辿って

―菅江真澄隨筆連想―

新野直吉

初めに

平成二十四年度の館話は十二回の結びの三回を「布伝能麻迹万珥」を、十一月十六日(金)・十一月三十日(金)・十二月十四日(金)に扱った。著者の学的関心の深さ広さは感じ入るばかりであるが、今年例外的な状況が起こった。

それは、三回目の際、当方が「真澄先生が間違っている」という趣旨の発言をしたことである。『館話』なる試みで、真澄研究について全くの素人である自身が、本博物館の特有部門ともいえるべき「菅江真澄資料センター」の存在に鑑み、『菅江真澄全集』(未来社)を頼りに十六年も、未熟な拙話を続けて来たのであるが、その間「白井秀雄(著述の年月によっては菅江真澄)先生の解釈とは別解もあり得る(成り立つ)」とまでは述べたことが幾度かあるものの、事実関係について、「誤り」とか「間違い」とかと発言したことは無かった筈である。

当然真澄研究者を先頭に、講堂に集まられた各位の中では、「意外」とも「慮外なり」とも受け止められた向きが少なく

はなかったであろうと受け止められた。

時間の関係でその場で詳論できなかったもので、本稿において、当該の三の段階で正確な見解(単なる見解ではなくて『史実』であるが)を明記することにした。

一、布伝能麻迹万珥(4)

初めは「おいさみをのむそみかくだ」の項目である。出羽三山(羽黒山、月山、湯殿山)をかけた修験の行者が、飯Ⅱや(わ)ら、汁Ⅱおはしり、飯の湯Ⅱこくうざ(ぞ)う、火Ⅱおたすけ、酒Ⅱおいさみということを、自ら若い日大和紀伊の大峯入を体験している生きた知識の、酒Ⅱ胡麻酢、五鬼助の酒Ⅱ藪むくりということも併せ示して、「羽黒(修験)の齋忌詞イミ」なるものの解説をしている訳である。軟ら、走り、助け、勇みなどはよく分かるが、こくうざうは、一般にこくぞうという「虚空蔵菩薩」に発する「虚空蔵」に発しているのであると推解した。

次は「ふくひきのもちひひ福引の餅」である。当日搗いた

餅を東北地方では焙り食することを決してしないということの叙述であるが、普通「陸奥出羽」の順になるところを「出羽陸奥などにて」と書き出しているのは出羽の久保田に居住している者の主体性の表出であろうか。この風習は自分の子供時代にも常識であった。出羽に生まれ育ったのであるから不思議もないが、ただこれは「東北の習俗」ということではないように感じた上で次に読み進むと、それは骨を拾う際に「糞を兩人居て曳手切て火に打入る事行るならはし」を忌み嫌う故だとの解説になる。そのうえさらに「『塩囊鈔』三ノ巻に年始賞餅くだりに云ク」として「二人むかひて餅をひきわくるをば福引と云ひならはせるもゆゑなきにあらざるか。又大裡にて餅の名を福生菓と云る」なる引用をしたのに続け、「福曳といへるを忌きらふも国どころのならはし也」と述べるところで、「出羽陸奥」に限定したという文章構成として書き起こしたのではなかったのだと気付かせる。「信濃国牛伏寺の正月の備餅を福出といふ。また出羽にてもしはいふ也」と結ぶのも、地域限定の構文ではない。博識は示されるが整文性に欠ける感もあるが、何か別の意図がある構文なのであるか。歳徳神に供える鏡餅は「お供え」と呼んだが、小型の諸処供え用のような丸い餅は、当方も家郷では「福出餅」に当たる呼称をしていたことを想起した。

次は「くずばな、くずのうを」であり、「大和ノ国芳野葛とて葛粉の名に負るは、いにしへ国栖人の家に製つて貢しより、其草をくず、くずの葉、くずかづらともいへるにや」と書き出す。「にや」なる推量形であるが、「鮎魚を国栖の魚といふ」のは吉野の方言だと『日東魚譜』なる引用文献を示して述べたり、「阿由」と思う人の多い魚は「沙魚」でそれは秋田の琴の海（八童湖）で大変多く漁獲のある魚で、方言「群聚」だがそれは国樺の訛であろうと結ぶ。考察多方面の本領が短文の中にも充分に示される。

ついで「そでのうら」である。ここでも「袖ノ浦は同国由理ノ郡吹浦（飽海郡遊佐町）といふといへり」と書き出すのは、前の「群聚」について「出羽ノ国秋田の琴の海」と書き出羽国が対象になっていたことの記述を前提にしていることであろう。だが校訂者が（括弧）で示したごとく「由理（利）」としたことは合わず、飽海である。それはそれとして、直ぐ「又みちのくに」と筆を続け、「衣河」の末を「袖の湊、又袖ノ渡」、石巻の「袖のわたり」について記し、返す筆で「出羽の国福浦を袖の浦といふ」と関連叙述する。いうまでもなく「吹浦」のことで、別字を用いたのは用字多様の本領を見せるものといえる。そして、それは「息長帯比売命のよし（由）ありて袖の浦あり。また蚶鹵に袖掛ノ松などいへる名も聞えたり」

と神功皇后伝説に結びつけられた話題に關連づけられる。

庄内や由利にとどまらず、「此袖の浦のゆかりもて、秋田の土崎の湊を御裳ミモスに准ナズラへて裳モソの浦ウラとし御裳オモノ浦ウラとせり」と土崎にまで展開を見せる。更に「オモノ御物川の湊なれば面オモの川カハなども字カキなしたる、寒風も古モト坡ブカ欠山ケヤマといひしを好事オモシロコトどもや寒風オモシロコト伊勢山イセヤマと句詩クシに作り和歌に詠るより其名みやび聞えたり」と男鹿にまで筆が及ぶ。随筆というものは然るもののだといえはそれまでであるが、羅列の内容に關して解説が乏しいようにも思われる。

むしろ項末部の「秋田の山賤等は外ソトといふ事をもはら外ソトといへり。山郷ヤマサトなどに外山ソトヤマ、外崎ソトサキ、外沢ソトヅメといふ名、出羽陸奥ともにと多し。袖の浦も袖の渡りも袖の湊も本外モトソトよりや云ひ出たらむ」なる解釈や、「遠き筑紫にも袖といふ地トコロあり。菅公左遷の御船も筑紫の博多にいたり給ひ、袖の湊よりおり給ひしといへり。此袖の湊も外ソトのこゝろあるにや」の解釈に心惹かれた。

次いで「似たる名どころ」で「出羽の銅山を阿仁といふ。もろこしの金山に銅仁トコロといへる地名あり。そは『天工開物』に見えたり。又出羽の八ミツ童湖ウミ近く雄琴川オノノカハ〔今琴川といふ〕あり。近江の湖の辺アヅリに雄琴山オノノカハ〔志賀郡に雄琴ノ社あり〕といふあり。能ノ相サマ似ニたり」と述べる。正に和漢に通じ、經驗に基

く実証性豊かな叙述であり、近世のことを学習不充分の者にとつては有難い論である。短文であることにもよるが、全文引用となつた。

次の「いとこや」は「南部田名部（むつ市）の県サトあたりにて、したしみむつびぬるをもはら（専）たがひに（いとこや）（いとこよ）と呼べり」という事実体験から、「なから（半）戲コトキコエの如聞るとも、そはもともいにしへさまの詞にぞありける」と学識を示し、そこで当時の新研究ともいふべき大著の『古事記伝』を引用、「十一卷九丁伊イトコ古コ夜ヤは妹イモと云コトバ枕言マクシと聞えたり。伊イトコ古コと人を深く親睦ウヂむ称ナにて、伊イトコ富ホシ志シ伎キ子コてふことなり古ノ字は子飯字に用る此記の例なり万葉十六九丁に伊イトコ古コ名ナ兄ケミ乃ノ君キミ居イリク而物テモノ爾ニ伊イ行ユク跡ト波ハ云々、と聞えたり」と述べる。結論は「うべもいとことこゝにいふ事、いとくふるくぞ思はれたる」というのである。以前にも触れたが、著者は本居についてその業績は評価していたことを示しているものと考えられる。

一つイトコとは關係のないことであるが、県にサトとルビしている点について寸言したい。近代秋田県秋田郡（明治十一年南北に区分）の如く、県は上位郡は下位の地域区分なのに、里にあたるサトの訓を県に附しているのは、真澄翁の段階には県郡市町村制は行われたことがなく、古代国県制度の知識に基き、県はサトと称するに相応しい地域単位と

把握していたのであろうと推考される。古代の地方制では（このみやこ）あがたみし国造・県主の領域があり、国の方が広域で、県の方はそれより小さい纏まりであった。国造の国はやがて大方郡（こおり）になりその上階に国司の赴任管領する律令制の国が設定されることになる。

次の項は「袁弊羅」である。「いではみちのくにて、客にも進めてす、み喰ひもてなごりくひはつるを、をへらと云ひ、又へらかづくといひ、へらまひともいへり。食（ヲシ）じにや。今は俗（サレヒコト）しやもじにて飯匙（イヒカヒ）の方言也」という話である。例によつて谷川士清の『倭訓栞』を引用して万葉にも言及しているが、特に注目すべき論説とは言えない。

此の回の終りの項目は「うすだたみ」である。「阿仁比内のわたり（辺）にて、うすべりの裏になむしろをさし付たるを薄（ウス）畳、なから（半）た、み、半畳（ハム）な（ミ）どいひ、つね（常）のた、みをあつだたみともはらいへり」という事実描写の主に続き、ここでも『倭訓栞』の「うすだたみの条」として「大嘗会式に薄畳とみゆ。又うすべりといふ、薄縁の義也。三議一統に見えたり。古へのた、みは是なるべし。韓子に禹王蔣席を作り頼縁すと見えたれば、縁の飾を加へたる始なるべしといへり。涼簟といふも是なり、と見へ（え）たり」として、「こ、にうすだたみといへるは、いとくふるき詞にこそ（あ

れ）」といふ自説を結語としている。

補記すれば、蔣の字は蔣介石の名で日本人には周知だが、「まこも」即ち菰である。頼は經の俗字で色を重ねた赤色の意も、浅い赤色の意もあるというが、頼という文字を用いれば理解し易いテイの音である。涼簟はリヨウタンもリヨウテンもあるが竹筵である。

二、布伝能麻迹万珥（5）

今回は「筆随意二ノ巻 菅江のますみしるす」と冒頭記のある巻に入り、「てのくほ」なる項から読むことになる。「強飯（コハヒ）などを掌（タナヒラノセ）に居て喰ふ事を手の窪（クボ）すといふ処あり。これはくぼてといふよしならむ。くぼては『延喜式』にいふ葉椀也。窪手の義ならむ。窪杯（クボツキ）など云へるものもおなじかるべし」と記す。居をノセと読むのも特徴的であるが、『延喜式』の神祇式に「踐祚大嘗祭」で「神御雑物」一条に、「大膳職所備、多加須伎八十枚、…（割注略）…、並居葉椀（コハヒ）覆以笠形葉盤（比良豆）似笠形、以木綿結垂装飭」とあり、古典に通じた著者の学の表われなのである。葉椀をクボテと、葉盤をヒラテと読んでいた古語である。なおクボツキとルビを施す窪杯も、窪坏と土偏であるのが正らしいが、やはり神祇式で「春日神四座祭」条などに記載されている。

項目の「てのくぼ」についての論なら右で済んだ訳だが体験豊かな著者は、実地の見聞を直ぐ出して来る。「信濃ノ国ノ諏方（訪）の三月酉日の鹿頭そな（供）ふ神事に乾櫛の葉を竹針に縫ひ通し、それに麴を益てそを葉盛とて、また菱形餅なのりそなどの沖つ藻、また白兔なんど、みな長串にさしつらぬいて、みかしき（御炊）の料ならむか、桶二ツそなへに米もりたる、その桶にさして奉れり」と若き日の記憶を具体的に書く。

ここでも谷川土清の説を引いて引いているが、さらに「田舎にて田う、（植）るとき、朴木栢ならがしはの葉に飯、また魚またくさくさのあはせを盛る。木の葉なき村にては虎杖の広葉にも盛る也」という民俗を記す。イタドリのは当方未知のことであったが、「某の葉某（の）葉もみなかしは也。櫛柏はかいしき葉てふことの約りにや。その窪手といへるも、もと窪窪こそ古ならめ」と古語の学識で結ぶ。

「はこやなぎ」を次に読むと、「三河国額田郡弟見莊（乙見岡崎ノ駅）の北へ一里斗往て箱柳（岡崎市）といふ山郷あり。ふる地とおもはれたり」とウマヤといいヤマガといいフルトコロといい古様の語を用い所謂擬古性を顕示する。「そこに観世音を本居神と齋る。むかし此処に菅柳の多かりしを貢しより云ひそめし村名にや」と地名考証をする。真澄学

は当時台頭期よりむしろ成熟期に達していたその時代の「国学」と理念や構想に異りがあると述べている私見に於いては、著者が国学者ならば観音菩薩を産土神とするなどという中世的神仏習合神道のあり方を、躊躇を見せず注釈書きをすることもなく、肯定的平叙をするとは考え難い。続けて『文苑玉露』下巻菅柳の条に「縣居ノ翁云々、（延喜式などに見ゆる菅柳はやがて今の柳こり（行李）なり。されど端に竹を添たる事はなくておなじ柳にしてたる也。かつすべて生絲にてあり。賦役令に国々より筐柳を貢する事あり。しかればいとふるき世よりありて、式の頃までもおなじかりし云々」といへり。此柳のから（唐）名は白楊とかいひて、はこやなぎとよめり。いにしへこの三河の筐柳村より貢せしにや」と記す。故郷に対する懐しさを心の底に秘めて、幼少時学んだという植田義方が賀茂真淵の教え子で、親しい縁があるというのだから、「翁」は真澄にも特別の崇敬対象であったに違いないので、その名もここに示したものであろうと考えられる。

次の「くろゆり」は黒百合が白山、花淵山、夷島大黒嶋、秋田の馬場目山にある紺色の花を咲かせる百合であるといふ、これも体験豊かな記述である。『近世絵本太閤記』なるものに、車葉であるその花の絵を、実物を知らないからであるろう車葉を描いていないと、本草学者の本領に連なる論評を

加えている。

「にしき木」は「錦木」主題とする長文であるが、前半にはむしろ「椿木」と題した方が自然の椿山談が記されている。勿論書き出しは『東国名勝志』の序ノ巻の日ノ出の浜松前の続きに「錦塚安佐(淺)虫小湊の間にあ、にしき木の里こ、なりににしへ此処のならひに女を恋わたるに、にしき木とて柴をつか(束)ねて門にたつるに、いなめば其ま、捨おきぬる事とぞ。千東にあまりて男終に恋死しとて錦塚ノ名は残れり。《にしき(木)は立ながらこそ朽にけれけふの細布むねあはじとや》それより狩場ノ窟門を過て狭の里、爰にて布を織り出せしとなり。《夜と、もにむねあひがたきわが恋のたぐひもしらぬけふの細布》とあり。此かきし絵カキどもを見れば、ともしか、げて女の機おりたるに冠きたる男、柴をか、へて行かた也」とあり「錦」で始まる。

だが自発的な書き方で、「おのれかきし《津刈ツヅの遠》と云へる日記あり。其日記に平内ヒラナイ(《ヒルナイに》)の小湊の浜辺に出て椿山たづね見しに、まことに海榴ウヅバキのみいとく多く、こと(異)木は見えず生ひ茂りたる磯山ニッまでならびてあり。そこに椿明神といふ神カクラの社あり。椿明神は伊勢国にませりこそ、そも伊勢よりむかしうつしまつる御神にやと、浦人に問へば、いら(答)へて、へいな此神は女神也。むかし此浦にみめこ

とがら世に勝れたる女あり。吉備国の船人と契りて女の云ふやう、《こと国に椿キノ実多く椿キノ子の油を女は髪にぬりて色よくつや、かにつらく椿の色イ沢イなすよし、人のものがたりに聞キきふらへど此国には椿キノまれなり。此椿の油もておのが髪にぬらまくおもへどもせんすべなし。こたび吉備に販り給ひしならば、来む春は椿キノの実をつとにもておはしてわらはに給はれ。かならずわすれ給ふな、よしその油の木の子はとまれかくまれ、来む春までの別れせちに命しぬべうかなしともかなし》とて、男の袖にすがりてよ、となく。《春はかならずとくく船出してこ、に至らむ。また椿はきびの中山ナカヤマにいと多し。いくらもつとにもて来らむ、別はともにつきぬ余波》とて別ぬ。春にもなれば、けふは船こむ男やいたらむ、けふはそなたの風、あゆにや吹なん、あなじにや吹なん、しほかなふ日のはやいてこかしと待にまでとむなく、春も過ぎや、夏になり秋更ても船の来ざりければ、こは男の心かはりたらむと、それをおもひやみて女おもき病にふし、またのとしの春のなから斗女身まかれり。男は親のもとにくわき行ひのありて、二とせ斗心はみちのくにあれどすべなく、此事はててこたびやをら此こみ(な)とにこぎつきて女の事をとへば、三日四日さきつ日病して身まかれりといふ。男聞てこゑをあげてなげどかひなく、もて来りつる椿キノ子七升ばかり女の塚の

辺へまきちらし、これを手向でなくく販りしとなむ云ひ伝ふ。其木の实生ひ出でとしぐ咲にさきて、今は山二ツにこ
と木は一ト本もなく草だに生へずかく茂りぬ。おなじ椿の種
ならむを東山は早咲の花也。西はおくての椿也。かゝるよし
にて其女の亡霊をししか椿明神とは申奉る。此椿の小枝にて
も折りちりたる者を童など拾ひても風吹(き)海ある、也。
いたく椿ををしみ給ふ御神とて浦人恐れかしこみぬ。此阪さ
小湊里に出で北ノ方童子村〔弘法大師の作にて不動明王おはし、此村に於
り、そをもて童
子といふ也〕といふに入る。東方に大なる槻ノ木山際に二本
生ひたり。(是はにしぎと申木也。むかしはこを錦木の里
とて聞えし処)とあない(案内)ねもごろにかたる」と詳述
する。

浦人の言を写した部分と著者自身の語るところとの区切り
が必ずしも明快ではない文章になつているところはあるが、
一気に椿明神の伝説を記述している。

だが「椿明神」が「にしき木」項の主題ではない。第一、
両部神道であろうと神信仰に詳しい著者が、この陸奥湾に鎮
座の椿明神に関して述べる冒頭に、「椿明神は伊勢国にませ
り：むかしうつしまつる御神にや」という尤もな見解を提示
していたのであるから、椿に關係はあつても錦塚とか錦木塚
をいうものと、この椿明神は関わりがないことを『東国名勝

志』などの紛らわしい記述に対して明示しようとしたもので
あろう。

なお、伊勢の椿明神と書き示したのは、今で言えば三重県
鈴鹿市鎮座の椿大神社(つばきおおおかみやしろ)であろう。
祭神は猿田彦大神で猿田彦大宮ともいわれる神社である。
鈴鹿は国府や国分寺の所在地でもある。だが、この椿明神の
説話は、吉備国からの船路が陸奥湾に通じていて、野生植物
の伝播にまで関わりがあつたという、海運史や文化伝播史の
実態を物語っていることは確かである。瀬戸内の船運は太平
洋側を備前・備中・備後から直接近畿・東海・関東・東北と
直行したのではなく、内海を西に向い関門海峡から日本海に
抜け出て北航し、江戸時代の呼称で言えば「北前船」の航路
を執つたものに違いない。津軽海峡で右折しなければ、その
まま蝦夷地の西海岸を通り、古代からの「北の海みち」に接
続なり接触なりする航路である。男女の愛は勿論であるが、
物でも椿の実だけではない文物の交流があつた筈である。

さてここでの主題たる錦木塚についての記述は「誠の錦木
塚といふは南部ノ鹿角〔古へ上津野と〕郡毛馬内〔けまなにも蝦夷詞
云ひ、ないは沢也、今そこ〕といふ地(十和田町)に在り。いにし
に名沢あり、足の沢也〕を通過して太田原〔此里神
へ草城郷の男、毛布細道〔風張村といふ処にあり〕を通ひて太田原〔田シ
ンタ〕川中〔今舟渡りせり〕の里の市立に出ていつも毛布細布をうる

政子といふ女にあさからず契りて、艸木の里よりはるくの道を夜なく通ひ、門にしるしの錦木を立て更るまで門にしるべど親ども目さしく梟のこゑにしわぶき、また狐の啼けば起出て外をうちめぐれば、来る夜もくえ逢はで鶏啼ばすべなう朝露にぬれてくさぎに飯りぬ。此どもはよき人にあはせん。あか仏とあけくれかしづき、になう女をめで守りぬ。艸木のますらはは錦木をいく束となう立てもく取り入れず、おやのゆるさぬ中垣はえふみも越えなで、つひに狭布の渡りに身を投たり。けふのわたりのなみだ川とよめるは、今淵瀬と流のさまこそかはれ、神田の川をやいへらむかし。政子も此事を聞て細布の中に石を包て市立ん日を待て、太田原に行とて朝とく起出でおなじ流れにふたりと身をはめたり。おやども聞おどろきて、さばかりせちにおもひあふ中と露もしりせば、いかでか錦木を取りも入れざらむとて、こゑをあげてよ、となけどいふかひなき事になもありける。かくて千束の錦木もひとつに此男女の亡骸をおなじ塚にこめて隠し、そを錦木塚とはいふとなむ。後に男女のために大寺を建て、観音をばまつりて、錦木山観音寺とてそのころは卅七代孝徳天皇ノ御世、大化の初め恵海とか云ひし僧の書まなぶみ縁起あり。もともみだりがはしきかきまながらいにしへを見るに足れり」と縁起の漢文が整わないことまで詳述する。紙数

のこともあり、解釈とか意見とかは控えるが、話の骨格は世上知られる話である。

そして「錦木塚は南部鹿角毛馬内に在るがまことに聞ゆれど、いにしへその風俗はところく在りて、みちのくはなべて錦木を立て、いもせむすぶのみちやさだめたらんか。かの津刈の比良内に在る錦木の里もそのてぶり近き世まで残りしものならむか」という考察をも記述する。

更に、「古錦木は一説ニ云く、おくのえびすの男女よばはむとて文をやる事はなくて、一尺斗に木をまだらに色どりてその女の門にたつれば、あはむと思ふときは千束になりて取入也。あはじとおもふ人には取入れざるによりて、ちつか（千束）になりて朽よしよめる也」と重ね書いて結ぶが、読者としては千差の感じや考えを持つことになるだろうと思う。

三、布伝能麻迹万珥(6)

この回の初めは「ほそけやく」で、全集本の印刷では二行に過ぎない。毛馬内・花輪の辺で、何時も野火による山林類焼のあることを怖れて、春の半ばに自然発火の野火が起きる前に、多人数で風の具合を見て枯草に火をかけることを、「細毛といふ。いかなるよしにや」という、解説保留の文体で終っている。博学の著者にしては珍しい筆法と思うが、「毛」と

いえば通常稲のような作物を思い合わせられるから、そこから延長拡大して枯れて先端が細くなった枯草を頭に描き山野の枯草を指している方言と考えるのは如何であろうか。また鹿角のことであるが、前回の部で鹿角に註して「古へ上津野と云ひし処也」と述べていたことに対応することでもあり、ここで経緯を述べて置きたいと考える。

鹿角のことが「上津野」と記されて登場する文献は、『日本三代実録』である。この史書の元慶二年（八七八）三月二十九日条に乱の勃発からの記述があるが、仲々制し難く中央は名史藤原保則を出羽権守に任じ、七月十日出羽国が急奏して保則の着任が報告されるが、その奏文に賊地として「十二村」を表記している。筆頭の村名が「上津野」で、末尾の村名が「焼岡」である。筆順は北から南へとなっていて、焼岡はタケオカで金足の高岡であろうとされている。上津野は中津野とか下津野とかという地域地帯に対応する語であるから、米代川の上流地域という意味であろう。中流域は北秋、下流域は能代平野ということになる。

即ちこの時代には「秋田城下の賊地」と位置づけられていたのであるから、上津野は秋田城の管区に入っていた訳である。阿倍比羅夫の北航時には、越国の秋田・淳代・津軽三郡（評）として郡領（評督）を任命したのであるから、朝鮮半島で唐

と新羅の連繫によって、日本の同盟国というべき百済が亡ぼされるといふような（やがては友好国高句麗も唐に亡ぼされる）国際情勢になって阿倍水軍が西海の防備に当たり、比羅夫は大宰帥に転任してしまい、三郡（評）が越国から越後国出羽郡を経て出羽国となる時、その郡には淳代（能代）も津軽も位置づけられることはなかったが、元来の形勢からは津軽も出羽であるべきで、陸奥などには属さなかった筈である。武家時代になり鎌倉幕府が南部氏を南部地方北域に配置し、その関係で南部系武士勢力が津軽氏となり、津軽のみか比内までも中世南部領となる状況下、比内郡も南部領域の地とされる形勢となり、対抗して安東氏が比内を勢力下にして本来の出羽領域に定置したものの、上津野の後である鹿角までは古代の有り様の秋田管区に位置づけることには至らなかったのである。

「きそてのまき」は、「真木とは世に檜木也。岐岨山をよしといへり。南部檜木葉大にして厚し。是をこと国にて檜葉（ひば）といふ処あり。またくさまきといへる処あり。雑真木とはもともふる（古）き詞也。此木を古き説に幸草といふはあたらざれど、火避といふ事のさきはひあるをもてそれにやなづみたらむ。此木宮木の中の良材にしてわが国つもの、室のひとつ也。もろこしにはあらざるよしをいへり」と書くところ

ろは、誰でも認識する青森檜葉のことで知識が深まる場所である。

ところが、「もろこし」を引合にしたが如く、対馬宗氏が源頼朝の従弟で、平氏に従わず大陸の宋国に逃れ住み宋国王に同情されて領地も得て居住したが、頼朝に帰国を求められ、帰国して対馬守護になり、やがて宋国生まれの嫡孫太郎を呼び迎えて、永井と称したのを宋に改めて宋対馬守になったという話を記す。その帰国に当たり、「報酬として宋国にてのぞみの品ゆゑ、和紙ならびに檜木を贈る」という挿話で項題と結びついた叙述を構成している。著者らしい博学で巧みな構文であるが、この文に接する迄こんな珍しい話は知らなかった。

歴史学では、対馬守護地頭の少貳氏の地頭代として対馬国の官人だった惟宗氏が、実質的に対馬の領主的存在になり、元寇の際戦死の惟宗資国が宗氏を称した最初であるというのが定説なので、珍奇斬新な気持ちで読んだ。ただ『奥州征伐記』なるものを手にしたことがないので、それについて言及することはできない。

次は「えみしのせつ」で、「奈良の春日山などに在る宝蔵を井楼の如くなれば井楼組など俗もはらいへり。今南部にて粟稗米などあまたたくはふに、俵に入る事なく此井楼につ

める也。造りさまは板もて作りいさ、かことなれど凡ひとし」と書くところまででは、何で「えみし」蝦夷の語が標題に出ているのか分からないが、続けて「また蝦夷の高倉、また熊の子を養ひたつるに木を重ね組みて、一隅に柱三本を立て此柱を引寄せ、その柱のうれを三本引よせ蔓もてゆふ。これをせつといふ。こはいにしへの校屋あぜくらの残れるにや」という記述であることで納得できる。ただ古代校倉造を「いにしへの」工法の遺存であると把握し、その古(往にし方)を「蝦夷の高倉」に結びつけることに問題がある。勿論この蝦夷をエゾと読ませアイヌの人々を指すのであれば、「せつ」はアイヌ文化であるから問題はないのであるが、項目の標題を「えみしのせつ」と読み方まで示しているのである。明白にアイヌの文化を「エゾ文化」とするのなら近世の語法として受け入れられるのであるが、「蝦夷」は「えみし」というのであれば、「えみし」は古代東北住民の意であるからそのままでは通らないことになる。アイヌ社会と文化を熟知する著者がアイヌ文化を読者に示そうとすることは当然である。そしてこの古代文学や史学に通ずる人が「蝦夷」を「えみし」と読む古語を読者に示そうとすることも理解できる。ただ時代の前後する二つの併用が問題なのである。

次の「ゆのさうじ」は大湯が佐藤荘司の知行処だという話

題である。本当に義経家来の佐藤莊司が鹿角大湯の地頭だったのか否かは残念乍ら知らない。

次は「やまたから」で、「出羽秋田郡大阿仁風張郷〔今云ふ吉田村也〕

に近く三梨村に二戸あり」と書き出し、昔産銀が多かつたのに享保十九年に山崩れ、昔千余の家があつた繁栄も過去のことになつたと述べ、「誰が作りしか山宝といふ謡あり」と、歌詞を示している。これがなければこの謡のことも忘れ去られたかもしれない。

愈々「初めに」に記した「みちのくやま」の項である。「てむひやう（天平）廿一（七四九）年といふとしのきさらぎはかり、陸奥国百済王敬福がしれる小田なる山よりくがねほりうるを、大朝帝にたてまつりしを、中納言大伴家持ノ卿〔万葉集〕よめる長歌あり」と書き出して、その歌に「美知能久夜麻爾金花佐久と詠まれてる「みちのく山」を、「式内ノ御社ありて黄金山ノ御神ませり。此金花山といふ嶋山こそみちのく山と詠る山ならめと人もはらいへれど」、自分の見るところ金華山などではなく、「津軽路に至りてなほ此山をたづねめぐるに、耕田山とて岩木ノ嶽に並びたる大嶽あり。其山には櫛形小河嶺なクシカタコガネどなにくれかにくれと名だたる八峯あれば八ツ耕田山ヤチツカタヤマなども呼びなす山也」という自信満々の説を出し、「吾妻が嶽アツマといふ山あり。こは吾妻なるみちのく山

のよしにや。これをおもへば小金山花福寺は百済クダラの敬福が建し寺にて、黄金山敬福寺を方言称なへ伝へて今にしか文字かくもうつしたむか」なる考証も加えている。

しかしこれは全く誤りなのである。『続日本紀』の記すところは「百済王敬福伊部内少田郡仁黄金出在奏ヲ献」と、天皇が東大寺大仏に左大臣橘諸兄をして報告しているなど、少（小）田郡産出を明示しているのである。天平二十一年（七四九）四月十日のことで、産金により大仏に鍍金もできたのであるから、天皇はじめ当事者の慶びは大きく、年号も天平感室と改元され、その元年五月十二日に越中守だった家持が任地の国守館でその有名な長歌と反歌三首を詠んだのである。

ここで言う小田郡は後世の遠田郡で、湧谷に黄金迫（こがねはざま）があり、そこに黄金山神社がありその境内が産金の関係地であることが、昭和三十年代の発掘調査で確かめられ、同四十二年国指定史跡になっている。

これは八甲田の方に産金地がないとか、鉾山学に通じている著者が鉾山でないところを鉾山だと誤ったとかという批判ではない。小田郡は律令国家の郡であるが、津軽などはこの時代律令制の郡などになっていないのであって、もっとはつきり記せば陸奥国域はまだ今の宮城県までしか及んでいな

かったのである。三河の出である著者には思い及ばぬ状況
だったということなのである。

終りは「阿^ア袁^ヲ蘇^ソ神^シ仙^ン」の項である。「今云ふ仙北郡は旧ノ山
本郡也。仙北は元郡^{モト}ノ名にあらず。雄勝、平賀、山本を山北^{ヤマキタ}
三郡と云ひし也」と書き出しているが、紙数が尽きたので、
以下は言及を行わずに稿を結ぶことにする。

(秋田県立博物館名誉館長)

方言と昔話——内田武志の軌跡 I

東京学芸大学教授 石井正己



講演会風景

一、北東北の中心地・鹿角が生んだ内田武志

かれこれ菅江真澄資料センターとおつきあいが十五年になるかと思うと、感慨深いものがあります。この「真澄に学ぶ教室」でお話をさせていただきながら、真澄に対する研究をいぶん深めてまいりました。その間、さまざまな御教示をいただいた方が秋田にはたくさんいらっしゃいます。一昨年（二〇一〇）、その成果をまとめて、『柳田国男の見た菅江真澄』（三弥井書店）という小さな本を出しました。

昨年（二〇一一）九月には、県文化財保護室の「昔話・伝説・言い伝えなどによる地域活性化事業」の一環として、鹿角市の関善にぎわい屋敷を使って、「秋の夜長のこわい話」の会を開きました折に、鹿角の昔話についてお話をすることがあります。その時に重要だと思った人物が、今日から取り上げていく内田武志という人です。

鹿角出身者には、民俗学とゆかりの深い人がもう二人おられます。一人は瀬川清子と言いまして、「秋田の先覚記念室」でも顕彰されています。特に女性の民俗をきちんとまとめられた方で、近年その業績がさまざまな形で取り上げられています。早く秋田県を離れてしまいましたが、残した著作は、今後の民俗学の可能性を考える大事な拠点になると確信します。

もう一人はあまり知られていませんが、東京帝国大学で地理学を学んだ佐々木彦一郎という人です。この人は若くして亡くなってしましますので、先覚者として取り上げられておりませんけれども、同じ時代を生きて非常に重要な仕事をし

ています。柳田国男が「境を歩む人」という追悼文を書いています。この人の業績も改めて考えてみなくてはいけません。

鹿角出身者の会に鹿友会がありまして、そこで柳田国男が講演した折、これから自分に時間があつて、どこか日本の一つの地域を調べてみると言われたら、取り上げてみたいのは鹿角だと言ったそうです。もちろん鹿角出身者の会ですから、柳田がヨイシヨシしたということを半分は考えておかなくてはいけませんけれども、なぜ鹿角だったかということは大いに興味が惹かれます。

鹿角はかつて南部藩領でありましたが、廃藩置県で秋田県に入るわけです。あの地域というのは、秋田・青森・岩手三県に境をなすような、北東北の中心地に当たる場所です。鉱山地帯としても有名で、データを見ますと、米が二万九千石だったのに対して、鉱山は十万石でその四倍近く、金山十九、銀山六、銅山二十三、鉛山十五という数に及びます。やはり鉱山地帯として繁栄した地域であることは間違いありません。

北部に位置する小坂鉱山は一大都市で、鉱山に働く人々が町を形成し、学校・病院、そして慰安娯楽施設の康楽館を維持してきました。明治四十三年（一九一〇）にできた康楽館

が、二年前にちょうど百年経ったということで、私もその前の年だったかに小坂を訪ねました。鹿角も北と南でずいぶん違うと言われますが、あの町をどう考えるかということは、鹿角の歴史と文化を考える上でとても気になってきたところです。日本海文化と太平洋文化、南の文化と北の文化、山の文化と海の文化がどのように接触したのか、といういくつかの疑問が浮かびます。

そうした鹿角出身者に内田武志がいて、明治四十二年（一九〇九）に生まれ、昭和五十五年（一九八〇）に亡くなります。今年は三十三回忌に当たりますので、その供養にもなればと松山修さんと相談して、今日の機会になりました。

内田さんの研究を支えた人物は二人いて、一人は柳田国男、もう一人は渋沢敬三でした。柳田国男が亡くなって今年で五十年、渋沢敬三は翌年に亡くなっていますので、来年が没五十年になります。この二人の援助に支えられながら、体が不自由であったにもかかわらず、内田武志がどのような業績を残したのかということを考えてみなくてはなりません。

渋沢敬三は彼の出版を支えて、いくつかの文章を書いています。例えば、内田の『日本星座方言資料』には、「歩けぬ採訪者」という文章を寄せています。採訪というのはあちらこちらを歩いて、土地の古老を訪ねなくては進みませんが、

内田武志は歩けぬ採訪者だったというのです。あるいは、内田の『菅江真澄未刊文献集』には、「仰臥四十年の所産」という文章を書いています。この二つの文章は、涙なくしては読めないようなところがあります。

洪沢は、内田の強い意志と情熱を認めながら、情に流されない科学的な方法で丹念に資料を集めて研究を進めたことを高く評価します。このことは、方言や昔話にはじまり、やがて菅江真澄に至るまで一貫した態度で、揺らぐことがありません。「歩けぬ」「仰臥」ということは心を許した関係でなければ使えませんが、そうしたことを取り上げて、内田の心の中にまで踏み込んで書いている文章です。後に紹介したいと思いますが、本当に深い愛情と理解がなければ、あのような文章は書けません。読んでいてすがすがしい序文です。

菅江真澄資料センターでは、平成二十二年の秋に「没後三十年、内田武志の真澄研究」という企画コーナー展を行っています。松山さんがまとめた解説資料で、内田武志のアウトラインがくつきり見えました。内田武志の軌跡を探るといえるのは後ろ向きの態度ではありません。真澄研究の未来を考えるためには、やはり内田武志をきちんと理解して、その達成と限界を考えなければならぬと考えているわけです。

今回、「内田武志の軌跡——方言から菅江真澄へ」としま

したが、大きなラインはこうなります。

前期 第一期 鹿角郡昔話と鹿角方言集

第二期 静岡県方言誌

第三期 日本星座方言資料

後期 第四期 菅江真澄未刊文献集

第五期 菅江真澄遊覧記

第六期 菅江真澄全集

前期が方言研究、後期が真澄研究です。前期の方言研究は第一期から第三期に分けられますが、第三期の星座の方言が出版されるのは戦後になってからになります。従って、第三期は戦後の成果です。そして、後期の菅江真澄研究は未刊文献集、遊覧記、全集と進み、今日の真澄研究の基礎が出来上がるわけです。全集別巻二の索引編は未刊のままになっていますが、その功績というのは重要で、今もって私どもは内田の作ったものによって真澄を考えているのです。

二、方言研究の断絶から始まった真澄研究

今日の資料には戦前の内田の文章を列挙してみました。落ちている文章があるかも知れませんが、昭和五年（一九三〇）

二月から昭和十六年（一九四一）四月までを挙げておきました。雑誌が中心ですけれども、終わりの方になると、『静岡県方言集』『鹿角方言集』『静岡県方言誌』というように、方言関係の資料が一冊の本にまとまっています。今回、静岡の方言集を取り上げようかとも思ったのですが、鹿角と一緒に取り上げると中途半端になると考え、次の機会に回すことにしました。

昭和五年から昭和十六年というのは、大雑把に言いますと、内田の二十代に当たります。非常に若い時の内田武志の仕事です。二十二歳から十年間の仕事で、これだけのものを残したのは驚きです。大きくは鹿角の民俗と静岡の方言についてです。細かく触れられませんが、鹿角の民俗では、年中行事、童謡（わらべ唄）、昔話、方言といった具合に多角的に掘り下げています。

それに対して、静岡県の方は一貫して方言です。後で時間的なことに触れますけれども、やがてテーマ別の『静岡県方言誌』にまとまっていき、第一輯が動植物篇、第二輯が童幼語篇、第三輯が器具篇と分類され、こんなに厚い合計千頁にも及ぶ方言誌が出来上がります。それには十枚の方言分布図という地図も付いています。この時期の方言研究の集大成と言ってよろしいかと思えます。

ところが、昭和十六年四月に『静岡県方言誌』第三輯を出してから、戦後まで四年くらの空白期間があります。つまり、方言から菅江真澄に移るときに、大きな断絶があったことになりました。もちろん戦争が激化していくことがありますけれども、ここでの断絶とは何だったのか、沈黙とは何だったのかということを考えてみなければなりません。

こうして並べてみて考えられることは、鹿角と静岡県の方言研究について大きな達成を残しましたが、それとともに方言研究に向かうことへの限界があったのではないかと思うのです。そして戦後は、それを乗り越えるべくして、真澄研究に邁進していったのではないか。どうもそう考えないとうまく説明がつかないように思います。内田武志の真澄研究の前身に、方言や昔話があったということをどう考えたらいいいのか。そして、そこからの断絶を経て真澄研究が始まったということを変更して考えてみたいと思うのです。

内田武志は、『秋田人名大事典』には、「菅江真澄研究、民俗学。本名武。鹿角市尾去沢の礎発電所社宅生まれ。修三の二男。大正十二年八月鎌倉移住、大震災にあり、一年後静岡市に移る。十四年静岡商業学校に進むが、血友病のため、昭和二年中退。蒲原有明、柳田国男、渋沢敬三らの指導を得て、昭和十一年九月に『鹿角方言集』（刀江書院）を刊行」とあ

ります。今日はここまでのことが話題の中心になります。

血友病という病は、『広辞苑』によれば、「血液凝固因子の欠乏のため出血しやすく、しかも止血が困難な疾患。伴性劣性遺伝で母方から遺伝し、男性に発現。欠乏因子を血液製剤で補うことにより症状を防ぎ得る」とあります。つまり、隔世で遺伝して、男性に発現するのですが、血液を凝固する薬を使えば病状を改善するというのです。

内田さん自身、『静岡県方言誌』が復刻された『日本常民生活資料叢書』第一四巻の「解説」で、「生来の血友病者で、脚の関節に子供のころから障害がおこり、歩行には杖を必要とした。従って、兵式体操ができないからという理由などで、中等教育も満足に受けさせてもらえなかった」と述べています。静岡時代は、まだ杖をつきながら静岡近辺の漁村を歩くことができたようですけれども、やがて病が重くなり、秋田時代は「仰臥四十年」と言われるように、ベッドに仰向けに寝ながら、そこで学問を続けたのです。ちよつと動くと思わら出血するという困難があつて、病を抱えながらの学問でした。妹のハチさんが研究を一身に支えたこともよく知られています。

三、蒲原有明・柳田国男との出会い

内田武志が真澄研究も知らず、民俗学に志した入口のところはどうだったのか。大正十三年（一九二四）に静岡市に移って静岡商業学校に行きますけれども、昭和二年（一九二七）に中退しています。学校に行けない中で、病と闘いながら何を考えていたのか。『日本常民生活資料叢書』第一四巻の「解説」には、次のようにあります。

昭和四年だったように覚えている。そのころ出版されていた石川啄木全集を見ると、前年、静岡高等学校の文化祭に展示されていた、蒲原有明宛の石川啄木書簡は収載されていなかった。それでそのことを編集者の吉田孤羊氏に伝えると、さつそく静岡市鷹匠町に居られる蒲原有明先生を訪ねて発表くださるよう依頼して欲しいといってきた。

昭和四年（一九二九）ならば学校を中退してから二年後です。石川啄木全集に蒲原有明宛の書簡が載っていなかったのので、編集者の吉田孤羊に伝えたのです。吉田は盛岡出身で、盛岡市立図書館長を務め、啄木研究者としてよく知られた人です。内田は啄木全集を一生懸命に読んでいて、蒲原有明宛の書簡がないということに気がつくのですが、相当注意して

読んでいたはずで。啄木は盛岡出身ですので、同じ東北出身ということもあつたでしょうし、『一握の砂』『悲しき玩具』という短歌集を出し、二十代後半で亡くなっています。夭折の中で業績を残した存在は、病を抱えた内田にとつては輝かしいものだったにちがひありません。啄木への親近感には想像を超えるものがあつたはずで。

そこで静岡にいた蒲原有明に会うのですが、続いてこうあります。

蒲原先生は、初対面のわたくしに「文学よりも今は民俗学に興味をもっている。柳田国男君が——」と、近刊の種々の民俗書を見せて下さつた。それが、わたくしの民俗学に対する開眼第一日で、当時何をどうしたらよいのか、生きる方途を見失つていた自分にとって、これが生涯の歩み方を決定した重要な日となつたのである。

蒲原有明が民俗学という学問に興味を持っていて、それを進めているのは柳田国男だと教えたのです。有明と柳田国男は、東京で明治の終わりに文学者の集まりで会っていますから、旧い友人です。昭和四年にはすでにさまざまな著作が出

はじめていて、有明はそれらを手元に置いて読んでいたのです。鹿角をふるさとする内田には、大きな刺激だつたでしょう。学校を中退して生きる意欲を失つていた彼にとつて、それは本当に生きる力になつたはずで。

さらに内田は、柳田との出会いをこう記します。

郷里の方言集を編み出したのは、昭和五年からである。そして、柳田国男先生に初めてお会いしたのは、翌六年秋ではなかつたらうか。静岡市の葵文庫講堂で「ヤスコの話」をなさつたとき、蒲原先生に紹介して頂いたのである。鹿角の方言をまとめていると申上げると、できたら送つてよこすようにと言われた。こうして、『鹿角方言集』が言語誌叢刊（刀江書院）の一冊として発刊されることになつたのである。

葵文庫では何回かの講演会を行つてきていて、葵文庫の資料を見ると、昭和五年三月九日に第二十五回の文化講座が開かれています。柳田の講演題目は「ヤスコの話」ではなくて、公式には「言語と習俗」だつたようです。ヤスコというのは、秋田でもそうだと思いますが、東日本の各地で、生まれた子どもを初めて外出させるとき、額に鍋墨などで×や+を書い

て魔除けにするという習俗です。その習俗の問題を柳田が話したのです。この講演は、「鍋墨と黛と入墨」と題して、後に『方言覚書』に入る内容です。そこで初めて出会い、柳田に鹿角の方言や昔話を書いていると話したら、それを送るよりに言ったのです。

この時、内田武志は数え二十二歳です。その前にすでに『民俗学』という雑誌に報告を発表しはじめていますから、民俗学に興味を抱きはじめていました。そんな時に、あこがれの柳田が静岡に講演に来たのですから、これは行かないわけにはいかないとなったのでしょうか。内田が原稿を送ったら、柳田国男は『桃太郎の誕生』という本に入れる「瓜子織姫」の中の「諸国の瓜子姫」に、最近送られてきた資料を載せるのですが、その一つに「秋田県鹿角郡の例(内田武志氏)」とあったわけです。これはうれしかったでしょうね。

妹のハチは、『菅江真澄顕彰記念』の「菅江真澄への歩み」で、「これまで、昔話が価値ある祖先の遺産だとは考えてもみなかった頃のことだっただけに、こんな自分にも、成すべき仕事があり、学問に貢献できることを知った」と紹介しています。「こんな自分にも」の「こんな」が指す内容は、病のことからはじまって、あらゆることをひっくるめて「こんな自分にも」と言ったはずですが、蒲原有明に民俗学があると

教えられ、柳田国男に会って送った自分の報告がそのまま載せられたというのは、青年の一生を左右したはずです。そうした出会いの中で、本当に学問で生きていこうと思ったのでしょうか。

四、『鹿角方言集』と柳田国男の配慮

ハチの文章は、「次に「鹿角方言」をお送りした処、蒲原先生を通じて、「方言誌叢刊」に入れようとお言葉があり」と続きます。正しくは「言語誌叢刊」で、内田の草稿はやや後れ、昭和十一年(一九三六)の『鹿角方言集』として刀江書院から出版されます。「次に「鹿角方言」をお送りした処」という言い方からすると、先に昔話の草稿を送り、方言の草稿は後になったようです。

実は昭和五年というのは、柳田国男にとっても重要な時期でした。簡単に言うと、ちょうどこの頃から、昔話と方言の研究が本格的に始まったと言っていると思います。時代の巡り合わせというのは不思議なもので、ちょうどそんな時期に内田武志は会っているわけです。岩手県の田中喜多美、山口県の宮本常一など、後に活躍する民俗学者が世の中に出てくる流れの中に、内田もいたのです。

例えば、昭和五年三月には、アルスという出版社が出して

いた日本児童文庫の中に『日本昔話集 上』を著します。これはその後、『日本の昔話』と改題され、柳田国男の本の中で最も読まれる本になります。昭和五年七月には、言語誌叢刊の中に『蝸牛考』を著します。『日本昔話集 上』にしても『蝸牛考』にしても、昭和五年は、柳田国男が方言研究、昔話研究に進もうとしていた時期だったのです。

蝸牛というのはカタツムリのことですが、柳田はその方言などをアンケートで尋ねるのです。全国から集まったデータを地図に落とし、その結果から打ち出した仮説が方言圏論でした。京都で生まれた言葉が地方に伝わり、列島の南北に最も古い言葉が残ったと見ます。池に石を投げた時に波紋が広がるようにして、言葉が全国に広がったと証明したのです。ハチは、「昭和六年十二月には「長門俵山温泉行き」に旅費はやがて公刊される「鹿角方言集」原稿料として立替えてあげる——とまで御配慮を頂いた」と述べます。実はこの手紙が残っていて、内田自身が『日本常民生活資料叢書』第一四巻の「解説」に載せています。内田武志宛柳田国男書簡です。これは昭和六年（一九三二）十二月十四日の手紙です。

先日御話を致し候長門俵山の温泉は、どうも貴兄の病気にはきくらしく考へ申候。五十円だけ金を御用立可申

候付、一度試みに療治なされては如何。此金は南鹿角郡方言集が、公にせられた時その分、君の手に入るべき金なれば、自分のものの気で使つて差支なく候。往復に二十五円、残りで十日位は居られ申候。十日も居て少しも結果が無ければ帰つて来ててもよく、いよいよ効ありとわかれば後二十日位の金はどうともなり可申候。仮に全く無だであっても新しい風土を見、事物に接し、且つ静かに原稿を整理すれば、それだけは獲物に可有之。幸ひによくなれば今のやうに気ぜはしなく勉強する必要も無く、快活悠長に学問に一生を捧げることも可能なるべく候。仍て親たちとも相談し、一つ風など引かぬやうに十分用心しつつ春にもなつたら行つて見ては如何に哉、但し湯はややぬるく候が氣候は南だけにひどく寒からず、或は梅などの咲く頃になってからでもよし、俵山郵便局長の藤井氏は立派な人にて自分も古風な旅館を経営す。いよいよ行く気ならば此人に小生よりよく頼み世話してもらひ可申候。

山口県の俵山温泉は湯治場としてよく知られています。この時期には、「南鹿角郡方言集」という書名を考えていたようです。方言集の原稿料を前もつて自分が渡すから、それで

温泉治療に行ったらどうかと勧めたわけです。柳田もいろいろ考えて、この手紙を出したのでしょう。なかでも、「新しい風土を見、事物に接し、且つ静かに原稿を整理すれば」には、湯治によって肉体的精神的な活力が生まれることになればいいという望みがあったのでしよう。

しかし、ハチさんが書いた文章に戻りますと、「御配慮を頂いたが、結局、お断りしようと、上京し親類の家に着いた夜、出血がおこった。武に代り当時東京女高師在学中のハチが柳田邸をお訪ねし、兄の病床を説明し、御辞退の理由を申し上げると、先生は「気分がよい時これを読んだら」とお貸し下さった『南部叢書』六巻に収載された「けふのせばのもの」は鹿角郡の花輪町、大里、小豆沢村、湯瀬を通りすぎて行く一人の旅人の紀行文であった。これが武と菅江真澄との初対面で、この旅人と武は後半生を共に歩み、命果てる七十一歳まで続いたのである」と続きます。

柳田の好意はわかるけれども、内田武志の病状はだいたい進んでいたようです。一人旅に耐えられるような体力はなかったのです。柳田の病状認識は甘かったことになりましたが、それを責めるわけにはいきません。柳田からこれだけの手紙を貰ったら、自分で挨拶に行かないといけないと思ったのでしようが、東京に着いて出血してしまったのです。病状を聞

いた柳田が「気分がよい時これを読んだら」と言って貸したのが、昭和二年に出版された『南部叢書』の菅江真澄の紀行が入った巻だったのです。これで、内田は、江戸時代、自分の故郷・鹿角を旅した菅江真澄を知ったのです。昭和六年の終わるか昭和七年（一九三二）の初めには、菅江真澄と接していたことがわかります。

やがて昭和二十年（一九四五）五月、戦争疎開で秋田県の毛馬内町（現鹿角市）に戻ってきます。柳田の配慮で菅江真澄の存在を知ったものの、真澄研究に進むまでは十三年くらいの期間がありました。内田の志を知った毛馬内町長・伊藤良三から『秋田叢書』と『秋田叢書別集 菅江真澄集』の贈与を受け、以来真澄研究に入っていくわけです。このことは、別の機会にお話ししたいと思います。

五、内田武志の真摯な研究姿勢

内田武志は昭和七年の初めまでに菅江真澄を知ったのですが、昭和五年から六年にかけての関心は昔話と方言でした。やがて昔話と方言はそれぞれに研究が分離してしまいきますけれども、彼が接した時代は昔話も方言も共通の関心の中にありました。内田が柳田国男に宛てた手紙が残っていますので、それに触れてみます。昭和六年五月七日ですから、先の柳田

の手紙より半年くらい前のものです。長くなりますが、三つに分けて全文を引用します。

拝啓 此のたびの旅と伝説にお久振りに先生の御説を拝見致しまして、大変嬉しう御座いました。成るべく御説の通りに採集致さうと存じます。

これは、昭和六年四月の『旅と伝説』第四年第四号の「昔話号」に触れた感想から入ります。「成るべく御説の通りに採集致さうと存じます」というのは、巻頭に載せた柳田の文章「昔話採集者の為に」に応じた感想です。この号は後にそのまま『昔話採集の葉』という一冊の本になります。その中には、内田の「鹿角郡昔話」も載っていました。

「御説」というのは、どのように始まって、どのように終わるのか、地方によって違う昔話の形式をはっきりさせなさいということなのです。そして、柳田の呼びかけに応じて、日本各地で昔話の形式がどうなっているのかという報告が集まってきました。初めはだいたい「むかし」とか「むかしあったとさ」ですが、終わりは各県で違うくらいばらばらです。柳田は、昔話の内容ではなく、「むかし」という言葉で始まる話を「昔話」と呼びました。従って、昔話を定義するとき、形式が

とても大事だったわけですね。

内田もそうした報告を寄せた一人で、こう続けます。

私達の聴きました昔話の初めは「昔あつたどしア」で初り、結末は「どつとはれア」で終わりました。そして聴者は一句毎に、「はー」と云うのでした。又うるさく昔話をせがむと、こんな話もされました。

「昔アむんちけで話アはんちけで。どつとはれア。」

「昔あつたどしア。或どごに蟻こア一升。行ぐどごに蝦こア一升。来るどごに栗こア一升。あつたけど。どつとはれア。」

これが鹿角の昔話の形式だったのです。秋田県では普通、「どつとはれア」ではなく、「どつびんばらりのぶう」です。「どつとはれア」で終わるのは南部藩、岩手県です。鹿角はかつて南部藩だったために「どつとはれア」で終わったことがはっきりします。今では常識になっていますが、当時はまだ何もわからなかったのです。

内田は鎌倉に出るまで鹿角の地で、生まれながらの病を抱えて生活していました。その中で、お母さんをはじめとして、さまざまな人が昔話を聞かせたのでしよう。幼い時の非常に

大きな言語経験の中に昔話があったはずで、柳田に送った原稿のほかに、最近お母さんから「鼠の国」の話聞いたことに触れ、お母さんや叔母さんから聞いた昔話が数編あるので、あとでお目に掛けたいと思いますと書いています。

内田のすごさは、その後にあります。

次に御掲載下さいました鹿角郡昔話の中にあります会話中の「…べー。」は、全部「べし」の誤植で御座います。「祭見に行くべー。」と云ひますと、「祭を見に行くでせう」と云ふ推量、又は念を推す時の語になりました、「しませう」「しよう」と云ふ時には、「べし」と申します。既に御承知で居らつしやるとは存じますが、ちよつと気附きました儘、申し上げるので御座います。

「べし」の「し」を、長音の「べー」に間違つたというのです。実際、雑誌の本文はそうなっているわけです。私だったら柳田にこういうふうには書けないと思います。「既に御承知で居らつしやるとは存じますが」とありますが、この原稿は柳田自身が整理したはずですから、たぶん認識していなかつたはずで、先生であつても、これは誤りだということをちゃんと言えぬ勇気を、二十二歳の時に持つていたといふことです。

これは本当に大切なことで、学問の姿勢は筋金入りと言えましょう。こういう態度が七十一年の生涯をかけた学問を支えたのだと思います。

アルスの『日本昔話集 上』が出た時に、『旅と伝説』で、話の数が足りないからもっと知りたいので、身寄りの人に話してくれる人がいたら、断片でもいいから送ってくれるようにと呼びかけました。すると、全国から三十人くらいの人が原稿を寄せてきて、その中の一人に内田武志がいたわけです。柳田が「べー」と間違えた『旅と伝説』の「昔話号」は、そうした原稿を編集した特集号だったので。

秋田県は、日本の中でも昔話採集が遅れた地域で、本格的に始まるのは戦後になってからで、秋田大学の今村義孝と奥さんの泰子によるものでした。今村泰子が一生懸命県内を歩いたのは昭和三十年代になってからでした。ただ、戦前にまつたくなかつたわけではなく、鹿角の内田武志、角館の武藤鉄城、平鹿の寺田伝一郎といった人たちが昔話の報告を始めています。しかし、一冊の本にはなかなかならなかつたのです。武藤鉄城でさえそうでした。内田が送った「鹿角郡昔話」もいい資料ですが、雑誌に埋もれてしまったように感じます。内田の昔話は次のように発表されています。

昭和六年（一九三二）

4月 鹿角郡昔話 『旅と伝説』 第四年第四号

昭和八年（一九三三）

5月 猫の尾の毒―毒を感知する鳥から― 『民俗学』

第五卷第五号

昭和九年（一九三四）

12月 一五 猫又 『旅と伝説』 第七年第一二号

12月 四六 金をひる犬 『旅と伝説』 第七年第一二号

12月 五三 雁取り爺 『旅と伝説』 第七年第一二号

12月 五四 爺様と猿 『旅と伝説』 第七年第一二号

昭和十年（一九三五）

6月 鹿角郡昔話―秋田県鹿角郡宮川村― 『昔話研究』

第一卷第二号

7月 鹿角郡昔話（二） 『昔話研究』 第一卷第三号

六、「猿と蟹」に見る昔話と方言の一体性

『旅と伝説』 第四年第四号の「鹿角郡昔話」には、「一、猿と蟹」という話があります。昭和五十七年（一九八二）、今から三十年前に『日本昔話通観 第五卷 秋田』が出ます。三十年前ですのもう古いんですけども、その中の「512 餅争い―仇討ち型」の典型話です。秋田を代表する話として

載った一級資料です。

五話はすべて鹿角郡宮川村長峯（現鹿角市）の阿部ていと
いう四十九歳の人から聞いています。この人は叔母さんです。
母方か父方かわかりませんが、叔母さんが静岡県にやって来
たときに聞いた話です。

最初は「昔あつたどしア」、最後は、「どツとはれア」とあ
ります。昔話の形式をちゃんと載せています。少し丁寧に読
んでみたいと思います。冒頭はこうです。

昔あつたどしア。猿は蟹に、「かにどな、かにどな、
穂拾ひして餅搗かねアな」と云つた。蟹は「おー」て承
知して、二人で穂拾ひした。そして米にこなして、どこ
からか臼を持つて来た。そしたば猿は、「高いひらざ行
つて搗ぐべー」と云つた。

この「べー」が誤りです。「搗ぐべー」ではなく、「搗ぐべし」
としなくてはいけない。「ひら」に傍点があります。『鹿角方
言集』を見ると、「ヒラ 山の中腹の傾斜な処」とあります。
つまり、方言集と昔話がセットになっているのです。猿は蟹
に、「山の中の高い傾斜のある場所に行つて餅を搗こう」と
言つたのです。蟹も承知して山に登っていきます。

蟹は「こ、らだらえがな」て云ふと、「まちんと」と云ふ。又幾らか登つて行つて、「こ、らでえがな」と云ふと、猿は又「まちんと」と云ふ、とうとう山のでつちよう、に登つて、「こ、で搗ぐべー」と云つて、えんさど、が、ツたらやと餅を搗いた。

今、秋田では「まちんと」と言いますか。これを見ると、「まちんと」という言葉が出てきます。『鹿角方言集』に「もう少し、もう一寸」とあります。「山のでつちよう」にも傍点が振られています。『鹿角方言集』には「でつちよう」がありません。原稿が残っていて、野村純一の資料を見ると、「(絶頂)」と付いています。「山の絶頂」という意味です。「こ、で搗ぐべー」は「搗ぐべし」でなくてはなりません。

つき上がる頃に、猿はずるい考へを起して、一人で餅を食つてけべと思つて、白をでつく、と転ばした。白はごろごろとひらを転がり落ちて行つた。猿は其後をほんほん跳ねてほつかけで行つた。蟹はでんどけ、アして「あや、仕方ねアでア」と、泣きながら降りて行つた。そしたら途中のしだかぶ(藪)さ餅がごツとり落ちて居た。これ

ア勝負した(しめた)と思つて、蟹は其餅を食つて居た。

猿が一人で食べようと思つて白を転がしたら、餅が途中で落ちてしまつて、後から行つた蟹がその餅を食べていたので。でつちようが上で、ひらが下にあり、白はひらを転がり落ちていったことになります。「ほっかける」は「追いかける」という意味で、『鹿角方言集』に「ボッカゲル」と出てきます。「てんどけアして」は、『鹿角方言集』には「テンドケアス」と出てきます。意味は「吃驚仰天す。肝をつぶす」です。「しだかぶ」も、『鹿角方言集』に「シンダカンプ やぶ、藪」と出てきます。「勝負した」も、「シヨンプシタ」「シヨンプンケタ」で、「しめた。よかつた。うまくやつた」と『鹿角方言集』にあります。

そこさ猿が眼玉をきよろきよるさせながら来て、「がにどな、がにどな、餅ア落ちて無がけな」と云つた。蟹は正直に「ちんと落ちでだ」と云つた。猿は「俺さも呉ねアな」と云ふと、蟹は「そんだ(そなたは)落してやつた白さ入つてるのを食んだ」と云ふ。猿は「白さ入つて無がけ。その土こ附いでる所、俺さ呉ろ」と頼んだが、蟹に「土こ附いでも灰こ附いでも、あツぼろぎかつ

「ぼろぎ、食へばうまく候」と言はれたので、真赤になつて怒つてしまつて、「そんなら是から山々の千疋猿集めで、蟹の甲羅ぶツばなしてける」と云つて山に行つた。其後に蟹は「あえん、あえん」と啼いて居た。

そこに猿がやつてきて餅が落ちてなかつたかと探しますが、蟹は白に入っているのを食べるように言つて、喧嘩になります。「チント」も『鹿角方言集』にあり、「少し。少量」の意味です。「ソツダ」も『鹿角方言集』にあり、「貴方。お前さん」の意味です。「あツぼろぎかツぼろぎ」は見えませんが、『鹿角方言集』で「ホログ」は「振り落とす。ばたばた叩いて払ふ」という意味です。餅に付いた汚いゴミを丁寧に払い落として食べれば良いと言ふのは、いじわるされた仕返しですね。「ぶツばなす」は方言だと思ひますが、後ろには「打放す」とあります。猿は山々の千疋猿を集めて、お前の甲羅を潰してやると言い放つて行つたのです。こゝまでが前半です。後半は仇討ちになります。「猿蟹合戦」と同じようなものです。

そこへ椽とらなが来て、「何して泣いでるど」と聴いた。「猿ア今に山々の千疋猿集めで、蟹の甲ら打放してけるて、し

えた（さう云つた）もの」と云ふと、椽は「泣きとらな、泣きとらな、俺ア助太刀さ、へ、ア、んで」と云つて慰めた。そこへ又蜂が来た。次に牛の糞ア来た。それから杵と臼とが来て、皆蟹に助太刀することになつた。それで白と杵は、には梁の上に、牛の糞にはの隅に、蜂は窓にとまり、蟹は水ぎツち（水槽）の中に、椽は炉の中に居た。さうした処さ猿が入つて来て、炉に踏ん跨がり、「あ寒いあ寒い」と云つて、火をほかほかと掘ツげアした。

「しえた」は「しえつた」と同じで、「さう云つた」の意味でいいでしょう。「とらな」も方言だと思います。「泣いていゝるな」という意味でしょう。「へアんで」も『鹿角方言集』には出てきません。「してやるから」という意味でしょう。「には」は「屋内の土間」のことで、『鹿角方言集』には「ニヤ」とあります。「水ぎツち」の「キツツ」が『鹿角方言集』にあつて、「厚板にて箱状に作り水など溜めて置くもの。水ギツツ（水槽）」と説明しています。

そしたばどちんどちんと椽ははねで、金玉焼けどした。「熱ちでア熱ちでア」と云つて、台所の水ぎツちで冷さうとしたら、蟹にじやきんと挟まれた。「あ、痛でア痛でア」

といふところを、ぎツちやりど蜂に頬ぺた刺されで、泡食つて外さ逃げる拍子に、牛の糞ですら、ツと滑べらして、ずてんとひっくりげアた処さ、臼と杵がのちんと落ちで来て、猿アがツ潰されだ。どツとはれア。

最初に取り上げたこの話だけでも優れた報告であることは、大方が認めるところでしょう。擬態語が実に豊かで、かつての昔話を知ることができます。すべての方言が『鹿角方言集』に出てくるわけではありませんが、昔話と方言が密着してあることは確かです。内田武志の方言研究と昔話研究が一体化していることがこの一話だけでもよくわかります。

七、『旅と伝説』に載った二つの怪談

「鹿角郡昔話」の「二、米ぶき・粟ぶき」は『日本昔話通観』では「38 米福粟福―継子の栗拾い」で、シンデレラ型の話です。「三、鼠の国」は「1 鼠の浄土―隣の爺型」です。「四、瓜子姫子」は「35 瓜姫とあまのじゃく―仇討ち型」です。これは柳田も引いた話ですが、やまのさぐが瓜子姫子を食べたてしま、瓜子姫子に化けていると、烏が鳴いて知らせるのです。烏の鳴き声を聞いた爺様と婆様が不審に思つて、「瓜子姫子、瓜子姫子、しっこ出ないな」と言つて無理やりさせ

たら、瓜子姫子が尻を捲つた拍子に、尾がだらりと出て化けの皮が剥れて殺されたと展開します。

「五、歌をうたふ猫」は、『日本昔話通観』では「135 猫の秘密」として出てきます。ちよつと触れてみましょう。

或時婆様が一人留守居をして炬にあたりながら、「誰も居なくてきやない（退屈）な」と云つた。すると其傍に居た猫が突然口をきいて、「婆様、婆様、そんだら俺が歌ふから、誰さも黙つてしやべらないでください」と云つた。婆様はよしよしと承知すると、其猫はとろつとする様な真に好い声で歌をうたつた。其うちに息子が帰つて家の近くに来ると、屋内から何とも言へない好い声の歌が聞えて来るので、其まゝ外に立つて聞いて居た。やがて其声がやんだので、今来たと云つて内に入つたが、婆様の他には誰も居なかつた。「婆様婆様、今歌つて居たのは誰でや」と尋ねると、婆様は俺だと答へた。「んにや婆で無いでや。とても好い声だつけもの。んでや、誰でや」ときいた。婆様も最初は黙つて居たが、余りしつこく訊くので、たうとう「あんな、今猫が」と云ひ出したらその途端に、側の猫がぱつと飛びかゝつて、婆様の喉笛を咬み切つてしまつた。

猫が歌を歌うが、それを誰にもしゃべるなど婆様に念を押すのですが、それを破って殺されるという恐ろしい話です。末尾に柳田の注記があつて、「▽此話は普通に昔話といふもの、型にはまつて居ないが、相応に弘く分布して居る。恐らく話者が昔話をした人であつたのから、自然に其中に入られたのであらう」と指摘しています。昔話とはちよつと質の違う話だが、入れておいたのです。

柳田は五話だけ取り上げ、「狐と川獺」「山姥と小僧」「あらん子小らん子」「悪戯小僧」「猿と爺様」「猫又」の題名だけ載せます。みな叔母さんの阿部ていから聞いた話でしょう。後に「狐と川獺」から「悪戯小僧」までは『昔話研究』に載り、「猿と爺様」「猫又」は『旅と伝説』に載ります。

この時は外しましたけれども、三年後の昭和九年の『旅と伝説』第七年第一二号で、「昔話特輯号」を出した時に、「一五 猫又」以下の四話を取り上げています。「猫又」を見てみましょう。

或人が尾去沢から山越して毛馬内に行かうと思つて新田に出たが、それから迷つて遙か知らない山に来て仕舞つた。其中に日が暮れて来たので困つて居ると、向ふに

明るい大きな家が見えたので泊めて貰ひに行つた。台所には大勢の女子供ががやがやして居たが、泊めて下さいと頼むと、常居の方に通された。其中にどやどや、かぐぢ(裏)に行く音がしたが、しばらく経つと、後の襖が開いて年寄つた婆様が入つて来て「とつちやま、お久振りだなし。どでん(吃驚)召さないで下さい。私は祖父様に永年育てられた三毛猫だんし。此処は猫又と云つて村の余り猫が集る処で、今お前様の夜具布団を取りに行つたが、此処に居ると食はれるから早く逃げて御座い。此の床の間の隅にもと穴があるからそれをくゞると縁の下に出る。そして門を出れば川があつて、此川を渡りさへすれば猫が行けないからもう安心だ。早くして御座い。」と云つた。男は成程祖父様の代に三毛猫が年寄つて居なくなつた事があつたが、此猫だつたのかと思つた。そして云はれた通りにして屋敷外に出、着物を頭に結いて川を渡りかけた後、後からにやごにやごと大勢の猫が追掛けて来て何もかも怖しかつたが、やつとの事で川を渡つて向岸に着いたら、猫達も後を追掛けて来なかつた。山を登つて行くと、其中に白々と夜が明けて、四辺を見たらとんでも無い方角に迷ひ込んで居たのであつた。それからやつと道を見附けて家に帰つた。

つまり、年取った三毛猫が村の余り猫の集まる「猫又」という場所にいたが、婆様の姿になって恩のある孫を助けるという話です。この話は尾去沢から毛馬内に行く途中で遭った出来事として伝説化しています。これは『日本昔話通観』では「246 猫山」の典型話になっています。先ほどの「歌をうたふ猫」で、猫が婆様を噛み殺す話と対応しているように思えます。

兼好法師の『徒然草』には、奥山に猫又がいて、人をとって食うという噂があり、夜、連歌法師が賭け物をして帰ると、何かが飛びついてきて、「猫又だ、猫又だ」と大騒ぎしますが、それは主人の帰りを待っていた犬だったという話が出てきます。『徒然草』は十四世紀ですが、二十世紀に、秋田県では猫又という場所を訪れて殺されそうになるという怪談が語られていたのです。

その後に、「四六 金をひる犬」「五三 雁取り爺」「五四 爺様と猿」が出てきますけれども、それぞれ「257 水の神の文使い」「128 雁取り爺」「101 猿地藏―成功型」に属する話です。ここまでが『旅と伝説』に載ったものです。しかし、内田の報告は断片的で、一冊の本になるほど集められませんでした。それらはお母さんや叔母さんから聞いていますが、

すべて身内から聞いたものです。鹿角に戻って昔話を集めるということができず、これらの資料は静岡市で聞いた話だったのです。ここに限界があったことは間違いありません。

八、「昔話研究」に載った昔話と実話

さらに残った資料は『昔話研究』に載りました。「一 山姥と子僧」「二 あらんこ、こらんこ」は「4 三枚のお札―鬼を一口型」「76 おりんこ・こりんこ」に属しますが、ここで読んでおきたいのは「三 生れ子の運定め」という話です。

昔、年中旅をして、途中は何時も野宿して歩く人があった。或日山で日が暮れてしまったが、大きな石があったので其傍に泊る事にした。すると夜なかになつて「お石さんお石さん」と箒はらの神様が石の神様を呼びに来た。「今夜村の誰々にお産がある様だが歩くべし」石は「いや、今夜は客があつて行かれない」と断つた。暫くしてから又箒の神様が戻つてきて「生れた児は男だつけ。めアじよ、なを持つて生れたから大工になるべ。そして十七歳になれば死ぬな」と話してゐた。

翌朝その人は村に下つて行つて、聞いてみると昨晩の

話の通り、某の家に男児が生れたと云ふ事であつた。

それから十七年経つてから其の人は又、其の時の村に行つてみた。そして様子を聞いてみると、その男の児は大工になつたが、屋根から落ちて死んでしまひ、丁度其の日は七日目の法事をしてゐる処であつた。そこで其の人はその家に行き、十七年前の石と箒の神様の話をしたと謂ふ。

「めアじよな」は方言なんですけれども、意味が出てきません。あまりよくない運という意味でしょうか。この話は生まれ子の運命を予言する話です。大工になつて死ぬ時は「虻と手斧」のようなモチーフを持ちますが、昔話がたぶん具体性を失つて、世間話になつてゆく途中なのだろうと思います。その後、ちよつと重要なことがあります。

自分（話者）の父親がある時、盛岡に行つて泊り、其夜、便所に行かうと外へ出てみると、真暗な中から話声が聞えてきた。「何処其処では男の児が生れたが、あれは十七になれば、大工になつて屋根から落ちて死んでしまふ。」

其後、盛岡の人に聞いたら、果して其通りであつたと、

生前父親がよく語つてゐた。

これは昔話ではなく、もう実話です。この話者というのは、「六 ホンヂギとマハチブ」のところにある秋田県鹿角郡尾去沢村（現鹿角市）の栗山てるという五十七歳の人ですから、その父親の経験だと思ひます。つまり、昔話としても実話としても、「生れ子の運定め」は語られていることを明らかにしたのです。

この栗山てるという人の話には、子供に関わる話が多いのです。次の「四 子供育て」もそうです。

昔ある処に殿様があつたが、その家では、どうした事か、子供が育たず、皆生れると間もなく亡くなつて仕舞ふのであつた。

処が子供を育てるに上手な婦人のある事を聞いて、今度生れた子供はその女に預けて育て、貰ふ事にした。

其の女は、四方が板ですつかり塞がつた部屋を作つて貰ひ、決して誰も覗いてはならぬと云つて其の中に子供を連れて入つて行つた。

見るなど云はれ、ば尚見たいもので、そつと節穴から覗いて見た者があつた。すると部屋の中には、女が真

裸になつて寝転び、その体の上に子供を載せて、肌のぬくみを付けてゐるのであつた。

肌のぬくみと云ふものは弱い赤児には大変よいものと謂ふ事である。

殿様は子供が生まれると亡くなつてしまふので、子育ての上手な婦人に子ども預けたら、婦人は部屋の中に入って、自分のぬくもりで抱きしめて育てていたといふのです。「鶴の恩返し」みたいに、女は禁止事項を与えるわけですが、見るなどと言われると見たくなるのが人情です。

次の「五 雉の卵」もそうですが、今は省略します。栗山でるといふ人から聞いた話は、寿命が決まつていて死んでしまつたり、生まれてもなかなか育たなかつたりする話です。血友病を抱えていた内田武志にとつて、こうした話は他人事ではすまなかつたのではないかと思ひます。十七歳で死んでしまつた男の運命の話や、生まれて間もなく死んでしまつた子供の話は、他人事とは思はずに聞いたにちがひありません。栗山でるといふ人がどういふつながりで話したのかはわかりません。内田は尾去沢に帰れなかつたはずですから、何かの縁で訪ねてきた人で、その話を書きとめたのだと思ひます。

九、『民俗学』に載つた「猫の尾の毒」

一方、昭和八年の『民俗学』に載つた「猫の尾の毒」は、とても興味深い話です。

昔花輪町に井上長左衛門と云ふ大家があつて其家では猫と鶏とを飼つてゐた。或る日その猫が主人のお膳の上をぼんと跳ねて尻尾をぶるぶると振つた。猫の尾つばには毒があつて振るとその毒が落ちるもんだと云ふ。それを見た鶏は梁の上から羽根をばつためがして、塵を落しその御飯の中に入れて食はれなくして仕舞つた。二度もそんな事をしたので、其処の主人は怒り鶏を氏神さんのお堂さ持つて行つて放して来た。

その晩、旅の六部が来てそのお堂に泊つた。そしたら鶏が六部の枕がみに立つて、「かう云ふ家の猫がかうかうして主人を殺して自分が其処の主人になほ、氣になつてゐる。俺アそれに氣附いて邪魔したば此のお堂さ持つて来られで棄てられで仕舞つた。今朝も早く行がねアば主人が殺されるかも知れねア。早く行つて助けで呉る」と云つた。六部は眼を覚ましてみたら、枕元に夢で見だのと同じ鶏が羽ばだぎしてゐた。これア本當の事がも知れないと思つて聞いた通りに其家に尋ねて行つた。「お早や

がんし」と入つて行くと「六部さんお早やがんし」と其処の主人は家の中に入れてくれたので、炉辺に坐つて黙つて見てゐた。そしたば丁度朝飯になる処で主人のお膳を持つて行く時に其傍さ寄つて来た猫が其膳の上をぶんと跳ねて尾つばをぶるぶると動かした。それを見た六部はこれだなと思つて「そのお膳を一寸控へて呉んだえ。先づその飯を犬に食はせて見でくんだえ」と云つた。その通りにしたば、犬はくるくるつと廻つてころつと死んで仕舞つた。そこで六部は鶏が枕がみに立つた事を皆に話した。それがら鶏は又其家に連れて来られて死ぬ迄養はれた。

鶏は恩を忘れず、猫は恩を仇で返すもんだと云ふ。

これも尾去沢村の栗山てるといふ人の話です。一方で、静岡県駿東郡長泉村（現長泉町）地方でもこういう話があるとします。

昔或る家で一匹の猫を長い間養つてゐた。その猫は家人の居ない隙を見ては鍋の蓋を取つて尾を振つた。或る日それを其家の老母が見付けて不思議がり、猫が外へ出る時後をつけて行くと裏の竹藪に入った。そして一本の

竹の切口に尾を入れて又家の方に行つた。老母はその竹の切口を見て驚いた。少し水の溜つた切口の中には一匹の死んだ青蜥蜴が入つて居た。猫はその蜥蜴の水を尾につけて来ては鍋の中に垂らして居たのである。

これも猫が毒殺しようとしていた話です。先の「歌をうたふ猫」「猫又」から一連の関心を見ることが出来ます。それはともかく、この「猫の尾の毒」では、秋田県にも静岡県にもよく似た話があることを発見して比較しているのです。

これにはきっかけがあつて、この雑誌に石田幹之助が十世紀の『旧唐書』にシリアの話として毒を感知する鳥の話があることを紹介します。すると、佐々木精一が奥州にも十八世紀の『奥羽観蹟聞老志』にそういう話があると報告します。そして、浅田勇が八世紀の『アラビアンナイト』にもインド・イラン・近東地域の話があると報告します。つまり、中央アジアにある話と日本の奥州にある話が似ていることが話題になつていたので、内田は秋田県と静岡県にも似た話があることを報告したのです。

十、『鹿角方言集』の達成と限界

そして、昭和十一年九月に『鹿角方言集』が出ます。昭和

五年あたりにはまとまっていたようですから、六年間近く眠ってしまったのです。

これには、方言研究の第一人者・東条操の「序」が載っています。そこには、「よき方言集のできるためには、まづよき採集者がなければならぬ」として、「よき方言集を作るためにはよき地域の選択が必要である」とし、この『鹿角方言集』は、内田武志というよき採集者を得、鹿角というよき地域を選んだと述べています。

さらに、「蒐集が完全に説明が周到である」、「単語の選択法がまた光つてゐる」。そして、「実際に耳に聞かず口にしな言葉は一切之を採らなかつたといふ点に資料に統一があり絶対の信頼がおける」として、「土地も土地、人も人、双絶の方言集と称すべきであらう」と絶賛するのです。

一方、「自序」には、「鹿角郡は一般的に観て方言区劃上、南部方言の領域に属してゐる」とあります。「方言区劃」とは、方言によつて地域を区画する東条操の理論です。そして、鹿角も北鹿角と南鹿角に分かれ、宮川村でも長谷川方面と宮麓方面では対照的だと述べます。「昭和八年二月廿一日」の日付になっていますが、今から八十年ほど前には、鹿角でも北鹿角と南鹿角では言葉が違い、さらに集落ごとに言葉が違うほどだったのです。この時代には方言が生々しく生きていて、

言葉をしゃべればあそこの集落の人だということがわかつたはずで

さらに詳細な説明が続きます。谷内の語調は尾去沢村と似ていて、鉾山地帯ですからカネホリ言葉が行われます。一方、花輪町の方は町言葉が行われ、上品な語です。小坂には鉾山開発の關係から盛岡言葉も行われているということも書いています。しかし、「鹿角郡には嘗て纏つた方言集は発表されて居らぬ様である」とします。そして、柳田国男が「地理的にみて重要な地であつて未だ方言集の出来て居らぬ処として鹿角郡の名も挙げて居られる」と述べます。

具体的には、「かねて自分の記憶や父母から聞いた語を氣附く毎に書留めて置いたもの」と「其の夏、郷里から阿部貞子叔母の来静したのに訊ねたりして」、これをまとめました。阿部貞子は、昔話を語つた阿部ていと同一人物でしょう。原稿は柳田から東条に回覧され、やがて序文を書いてもらうことになったのです。東条の「序」は「昭和十一年八月」ですから、刊行の直前に書かれたものです。

末尾には、「この集は直接自分の耳から聞いた語のみを採録したもので書籍に見えても実際に聞いた事のない語は一切採らなかつた」とあります。厳密主義でまとめたのです。しかし、「山言葉や農業に関する言葉等、記すべきもの、多く

して挿入する事の出来なかつたのは自分ながら不本意な事であるが、何時か機会に恵まれて臨地採集の出来る日を俟ちたいと思ふ」としています。つまり、『鹿角方言集』は、鹿角ではなく、静岡で作った方言集であり、「臨地採集」ができなかったことに限界があったのです。

この「自序」は昭和八年に書かれていますけれども、次のような「追記」があります。

愈々言語誌叢刊の一冊として発刊されんとしてゐるが、最初これを纏めてから早や五ヶ年も経過してゐる。今又これを読みかへしてみると不満足な箇所が少くない。殊に現今の方言学界の趨勢から見ても説明不足の点が目立つ。然し帰郷して实地調査をする事の出来なかつた自分としては致し方ない。(中略)

尚此の集は音韻、語法篇が頁の都合に依つて割愛され単語篇のみ刊行される事となつた。音韻語法に関する事は同篇に詳記してあるので此の単語篇には記載を省略したものが少くない。いさゝか心残りであるがこれも致し方ない。只此の方言集を読まれる方には非説明して置かねばならないのは新文字「エア」を使用してある事で之は大體発音符号の「æ」を現はすものであるからその御

積りで御覧願ひたい。

そして、「凡例」が出ていて、職業や地域、性別などの注記があることも並べられています。

この方言集のどこを印刷してもよかつたのですが、一四四頁と一四五頁の「ト」から「ナ」にかけてのところを見ても、

例えば、「トンテギ」は「粗忽者。そそつかしや」の意味で、「——ダ奴ダ」とあります。「ナエフト」は「仕様の無い人」、「ナガンド」は「媒酌人。シエノガミサマに同じ」とあります。「シエノガミサマ」には「(一) 塞神様。(二) 媒酌人」とあって、対応しています。内田が知る範囲でまとめたものですが、昔話で見ましたように、大切な言葉は注意深く引いているように思います。

おもしろいのは「ナギデ」でしょう。「葬式の時備はれて泣き叫ぶ役をする者。棺の前で使者の生前の善行を讃へ、遺族の悲歎を述べて哭きくどき、又葬列中でも大声で哭き、埋葬の際は墓穴を掩はんばかりにして哭きくどくと謂ふ〔尾去沢村元山〕とあります。これは、いわゆる泣き女のことです。今でも韓国や北朝鮮でもそうだと思いますが、大声で泣いて死者の死を悲しみます。ああいうアジアにある泣き女の習俗

が尾去沢では生きていたのです。注意すべきところは、「哭きくどくと謂ふ」という記述です。この「と謂ふ」からすれば、内田はその場面を見たことがなかったはずですが、これが内田武志の厳密主義です。

母や叔母から話を聞くと、尾去沢村元山地域では、泣き女の習俗が生きているが、自分は見たことはない。見ていないけれども、確かに見た人がそう言っているのです、それを記録するということですよ。おそらく急速に消えてゆきつつある習俗だけれども、まだ生きている。しかし、内田は見たこともないということが「ナギデ」の記述からわかります。『鹿角方言集』は故郷の方言集ですけれども、「臨地採集」ができなかったことがよく表れています。

もうこのくらいで終わりにしますが、実は二十代の内田武志が一生懸命集めたのは、震災の後大正十三年から移り住んだ静岡県の方言でした。その結果、昭和九年二月に『静岡県方言集』という小さな本が出ます。蒲原有明が「序」を書いて、たいへん褒めています。内田は杖を突いて静岡市の漁村などを歩いたようです。

冒頭で渋沢敬三の「歩けぬ探訪者」を引きましたけれども、彼は歩かずに膨大な方言を集めたのです。なぜ歩かずに静岡県内の方言を集められたのかというと、アンケート方式を採

用したのです。学校の生徒に方言調査の報告を送ってもらって、それをもとに静岡県の方言を集大成したのです。内田は何も言っていないませんが、歩かずに方言調査をした達成とともに、その限界を深く感じていたはずですよ。

昭和十六年に『静岡県方言誌』が完結した後、内田は戦後まで沈黙します。戦争が激しかっただけではなく、方言研究を止めて真澄研究に行く沈黙の時間というものをどうしても考えざるを得ません。そこに何か大きな健康と学問の問題があったのではないかと感じます。それにしても、内田武志の優れて科学的なものの方は、この後の真澄研究に生かされてゆきます。この次には、方言研究の一つの極致だと思えますが、『静岡県方言誌』についてお話しして、真澄研究に仕上げたいと思います。

【参考文献】

- ・日本常民文化研究所編『日本常民文化資料叢書 第一四巻』三一書房、一九七三年。
- ・野村純一編著『柳田国男未採択昔話聚稿』瑞木書房、二〇〇二年。

(平成二十四年六月三十日、当館講堂にて)

菅江真澄と秋田のジオパーク

NPO法人あきた地域資源ネットワーク、文筆業 永井 登志樹



講演会風景

はじめに

こんにちは。永井と申します。これから「菅江真澄と秋田のジオパーク」というタイトルでお話しするんですけども、みなさんがどれくらい菅江真澄をご存じか、ジオパークをご存じかちょっとわからないところがあります。どちらもよくご存じの方、反対によくご存じない方、それぞれかと思えますが、きょうは菅江真澄については十分ご存じだということをお前提として、ジオパークのほうを話の中心に据えて進めてまいりたいと思います。

とはいうものの、今から十年以上前、「菅江真澄資料センター」で仕事をする機会を与えられて、先ほど過分なご紹介をしていただいた松山修先生や当時の館長であった新野直吉先生などからいろいろ教わってですね、菅江真澄に関してはある程度の知識を得ることができましたが、地質や地層、岩石など、学問としての地学を専門的に学んだわけではありませんので、ジオパークに関しては、わたくしはちょっと心許ないところがあります。

四年ほど前、当時はまだ工学資源学部の教授であった秋田大学名誉教授の白石建雄先生が中心となって、男鹿半島と大潟村、それに潟上市の豊川油田も含めた「あきたジオパーク」構想を提唱し、協議会を立ち上げました。後に潟上市が脱退し、「男鹿半島・大潟ジオパーク」という名称になって、日本ジオパーク登録に向けた活動が活発化していくのですが、その過程でわたくしもその活動に関わることになりました、にわか勉強を余儀なくされました。白石先生をはじめとする専門家、研究者の先生方に教わって、ようやく地学に関する

初歩的な知識を得たといったところです。

みなさんの中に地学の専門的な知識をお持ちの方がいらっ
しゃつたら、わたくしの話を聞くとですね、間違いがあつた
り物足りないと感じる点があるかもしれません、そこはど
うか、ご容赦願いたいと思います。

ところで、「菅江真澄」と「ジオパーク」、なぜ二つを並べ
て話すことにしたかといえますと、以前は菅江真澄の足跡を
辿っていてもですね、この二つを関連づけて深く考えること
はありませんでした。それが、ジオパークの登録推進に関わ
るようになってから、菅江真澄の記録、特に絵のなかには、
地質や地層、岩石について詳しく記し、描いているものがあ
る、ということに気づいたんですね。真澄の絵は、事物をあ
りのままに描くという意図があるというのは、以前から指摘
されていたのですが、特に男鹿半島の絵を見ると、岩石の種
類の違いや形態がすぐクリアルで、地形もちゃんとわかるよ
うに描いているんですね。

たとえば、年代的には真澄の九十年ほどあとの人になりま
すが、同じように各地の旧家に寄宿しながら旅に暮らした^み蓑
虫山人^{むしざんじん}という絵師がいます。蓑虫山人も男鹿半島に来て西海
岸の絵を残しているのですが、そこに描かれた岩石はのっぺ
りとしていて、色も均一です。真澄の絵は山水を題材にした

いわゆる文人画とも、蓑虫山人のようなプロの絵師とも違っ
て、描く対象物を区別し、それを見る人にはつきりわかるよ
うに描いています。

菅江真澄はもともと、自然科学者としての眼を持っていた
人でした。といいますが、故郷の三河や尾張で若い頃に本
草学を修めたと思われるからです。本草学は薬用や食用にな
る植物、動物、鉱物などを研究する学問で、今の薬物学、もつ
と広い意味での博物学といってもいいかと思えます。「草を
本とす」に由来するということで、薬に用いるのは植物が中
心です。中国から入ってきた学問ですが、真澄が尾張にいた
ころ、それが名古屋を中心とした尾張本草学として研究がと
ても盛んになるんですね。

真澄は当時の尾張本草学の中心人物であった松平君山や藩
医であった浅井^{あざい}図南^{となん}と交わりのあつたことがわかっていま
す。また、尾張藩の薬草園との関わりが推測される資料や、
伊吹山に薬草採取のため登った記録も残っています。これら
のことから、真澄は長い旅に出る前に、本草学と医術の素養、
知識を身につけたことは確かで、それが旅を続けていくうえ
で、大きな支えとなったと思われるんです。

わたくしなどは完全な文科系の人間として、高校時代は物
理、化学なんかは大変ニガ手な科目でした。一年生の時、選

択科目で地学をとったのですけども、真面目に勉強したという記憶はありません。でも、江戸時代、近世のころは、真澄の同時代人として一番いい例が平賀源内ですが、文科系、理科系なんて今ほどはつきり分かれていなかったのではないのでしょうか。真澄は源内ほど極端ではありませんが…。

菅江真澄については、日本民俗学の祖といわれる柳田国男が啓蒙したということもありますけども、これまで民俗学の人というイメージがずっとついてまわってきました。また、現代語訳の『菅江真澄遊覧記』（平凡社）や『菅江真澄全集』（未來社）の編著者である内田武志・宮本常一も民俗学畑の人であつたため、民俗的な記述が重要視される傾向があつたように思います。ですけども、ジオパークの推進活動に関わるようになって、新たにジオの眼を通して真澄という人物を見てみると、自然科学、人文科学の垣根を飛び越えて、その橋渡しをしてくれた人なのではないか、そう思えてくるようになります。

一、ジオパークとは

はじめに長い長々と真澄の話をしてしまつたんですが、ここでジオパークをあまりご存じない方のために、ちょっと説明してみたいと思います。

きょうここで話をさせていただくというのは、今年の春に松山先生からあらかじめお話しがあつたのですけども、はじめは「菅江真澄とめぐる男鹿半島・大潟ジオパーク」というタイトルにするつもりでした。でも、九月に日本ジオパーク認定の可否が発表されるので、「八峰白神」も「ゆざわ」もきつと受かるだろうから、これに「男鹿半島・大潟」を合わせて三つ一緒に話せばタイムリーでいいんじゃないかと思つたわけです。それで「菅江真澄と秋田のジオパーク」というタイトルにしたんですけども、そして、思い通り、両方とも受かつて、タイトル変更しなくとも済みました。

ジオは英語でGEO、「地球、大地」という意味です。ジオパークというのは、読んで字の如くといいますか、科学的に見て重要で貴重な地質遺産―地層、岩石、地形、火山など―が数多く点在する「大地の公園」のことをいいます。ただし、地質や地層、岩石だけが対象ではないんですね。

わたくしたちは大地の上に立つて暮らしています。大地がなければ人間というのは生きていけないわけです。地質遺産だけに限らずですね、生態系や人間生活との関わりも含め、今わたたくしたちが暮らしているこの大地のうえに成り立っている自然、その土地の風土ならではの食べ物やお祭りなど、そこで暮らす人々が育んだ歴史や文化も全部ひっくるめた自

然公園というのが一番わかりやすいかと思えます。

ジオパークは、二〇〇四年にユネスコの支援で設立された世界ジオパークネットワーク、頭文字をとってGGNといいますが、これによって世界各国で推進されています。またこれとは別に、日本国内では日本ジオパークネットワーク（JGN）により、二十五の地域が日本ジオパークに認定され活動しています。このうち洞爺湖有珠山、糸魚川、高原半島、山陰海岸、室戸の五地域が世界ジオパークに認定されています。（平成二十四年十月現在）

いまジオパークの一番の話題といえば、先ほどもお話ししたように、先月（平成二十四年九月）に「八峰白神」と「ゆざわ」が日本ジオパークに認定されたことでしょう。昨年（平成二十三年）九月にひと足早く男鹿半島・大潟が日本ジオパークに認定されていますので、これで秋田県に三つも日本ジオパークが誕生したわけですね。

これは凄いことなんです。他の都道府県では北海道にも三つありますけども、北海道は面積が広いですし、ひとつもジオパークがない県はまだたくさんあります。秋田県はまさにジオパーク県になったんですね。三つとも世界ジオパークを指しているんですが、なかなかハードルが高いです。秋田の三つのジオパークのうち、どこが最初に世界ジオパークに

なるか、これから競争になるかと思えますけども。

二、菅江真澄と男鹿半島・大潟ジオパーク

わたくしは男鹿半島・大潟ジオパークの推進活動に関わるようになってから、菅江真澄こそ男鹿半島のジオパークの価値に気づいてそれを最初に紹介した人なのではないか、と思うようになったんですが、実は男鹿半島だけじゃなくて八峰、それから湯沢も男鹿と同じかそれ以上に歩いていて、秋田県内の中では真澄の足跡がすごく濃厚なところなんです。それで、真澄は日本ジオパークに認定されたこの三つの地域のジオパークの価値と魅力を紹介した最初の人だということ、きょうの話のなかでみなさんにお伝えできればと思います。

ここから真澄が描いた絵と関連写真をスライドでお見せしながら、三つのジオパークそれぞれの特徴あるジオの風景をめぐっていくことにします。はじめにお断りしておきますが、きょうここでお見せする真澄の絵は、県立博物館が所蔵している写本で真筆本ではありません。

では、「男鹿半島・大潟ジオパーク」から見えていきましょう。「男鹿半島・大潟ジオパーク」の特徴は大きく分けて四つあります。ひとつはグリーンタフをはじめ、過去七〇〇〇万年

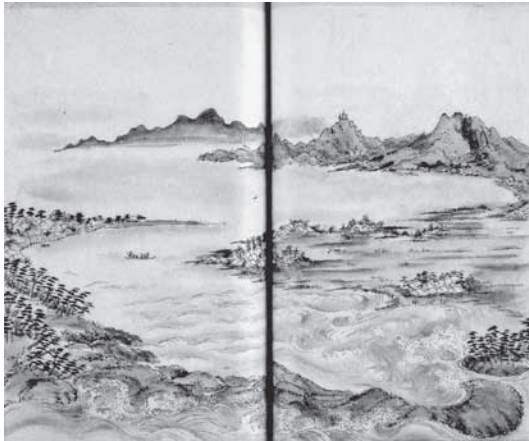
の日本海沿岸地域の大地の成り立ちがわかる地層が存在し、大地のドラマに恵まれていること。二つ目は地質年代でもっとも新しい第四紀における地殻変動が大きく、大地が動いた証拠と、それによって引き起こされた災害の記憶が残されていること。三つ目は日本最大の潟湖「八郎潟」に日本最大の干拓工事を施し、かつての湖底に人間のドラマが展開されていること。四つ目は豊かな自然・民俗・文化・伝説そして心温かな人たちと出会うことができること。これが男鹿半島・大潟ジオパークの特徴であり、ジオとしての魅力でもあります。

これが真澄が描いた八郎潟です（図絵1）。真澄独特の鳥瞰図の手法で描いたスケールの大きな絵で、汽水湖だった八郎潟と日本海を結ぶ水路、今の船越水道が描かれています。遙か向こうに白神山、そして五城目方面の森山、高丘山、向かって左が男鹿半島で右が天王側、手前が日本海。日本第二の湖だった八郎潟はさすがに大きいですね。今は干拓工事で十七万ヘクタールにも及ぶ人工の大地、大潟村に生まれ変わりました。

みなさんは干拓と埋め立ての違いわかりますか。干拓というのは、はじめにぐるりと堤防で囲ってから、その中の水を汲み上げて干上がったところに土地をつくるということ。よ

そこから土砂を運んで陸地化する埋め立てとは違いますから、頭の上がかつての湖面なんですね。水面より低いところ、かつての湖底に人が住んでいるんです。

今この船越水道には、JRの鉄橋、八童橋、男鹿大橋と三つの橋が架かっていますが、真澄が通ったころは橋がなく、「雄潟の渡し」という渡し舟で行き来していました。ここに



(図絵1) 『男鹿の秋風』 雄潟の渡し

舟が描かれています。船越水道は八郎潟干拓の際、シヨートカット工事で現在のようなまっすぐな流路になったのですが、かつては絵のように大きく曲がって日本海と繋がっていたのがわかります。

手前に細長く砂州すずが延びていますね。右下を注目してください。ちょっと尖っていますよね。このような地形を「砂嘴さし」といいます。沿岸の潮の流れや波によって運ばれた砂や砂利が堆積して細長く突き出た地形のことで、砂の嘴くちばしと書きます。真澄はこれをどうやって調べたんでしょうか。こうした地形を描くにはヘリコプターなんかに乗って海上に出なければならぬと思うんですけれども。実施検証したんでしょうか。不思議です。

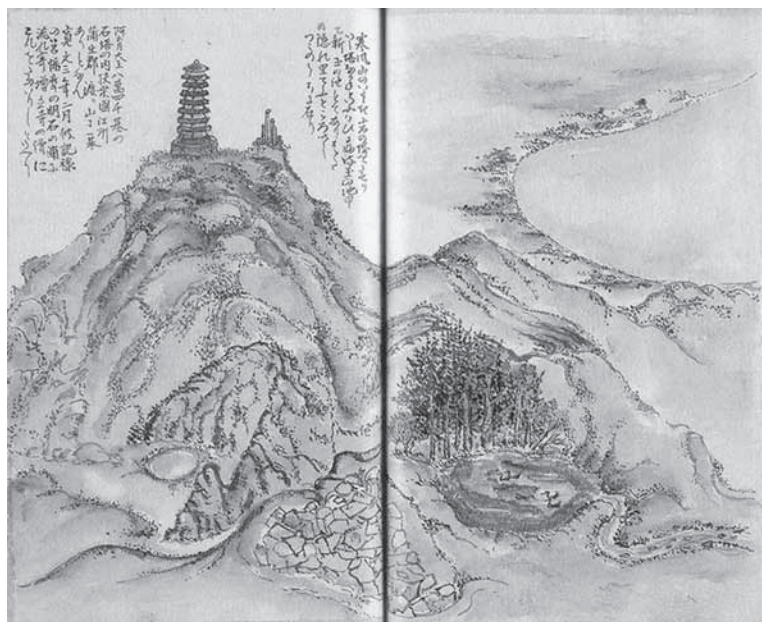
もう一枚八郎潟後編 1 函巻の絵。これは天王側から男鹿半島を見た絵ですけれども、ここでも砂州と砂嘴をわかるようにちゃんと描いています。この長い砂州は天王砂丘の一部で、鯨長根と呼ばれていたようです。

次は寒風山です。寒風山は秋田市からも近い観光地なので、みなさんも一回くらいは登ったことがあるかと思いますが、行ってただ上から眺めて、風景がきれいだなと感じて帰るだけではもったいないところです。標高三五五メートルしかない本当に小さな小さな山なんですけれども、ちょっと見方を変

えるだけで、とても興味深く面白いいものが見られるんですよ。

寒風山が火山だということを、知らない人も結構いるんですが、この山は二万年少し前ころから、数回の噴火を繰り返して今のような形になった複成火山です。二万年前といったら水河時代の終わりころで、わたくしたちの時間の感覚では大昔という気がしますが、地質の年代からすれば「ほんのちょっと前、ついさっき」といっていいかと思います。ですから、寒風山はとても新しい火山で、火口や溶岩が流れた跡、火山地形が間近で見られる「火山の箱庭」のようなところなんです。

これは寒風山を描いた真澄の絵です(図絵2)。ここが頂上。今は回転展望台が建っていますが、このころは後に地震で壊れたという九層の塔がありました。その下が第二火口、通称小噴火口。手前の石が積み重なっているのが「鬼の隠れ里」といわれているところです。第二火口の窪地に水がたまっているのがわかりますか。玉の池といいます。ここにお玉という村の娘が身投げして大蛇に変身し、尾根を越えて右側の新玉の池に移ったという伝説があつて、ここを蛇じやこし越長根と呼んでいます。この下の方にもうひとつ溜め池があつて、今はそちらの方を新玉の池と呼んでいますけれども、正確にはこれが



(図絵2)『男鹿の秋風』寒風山

新玉の池です。

この絵を見るたびに、本当に面白いと思うんですが、実際にはこういう風には絶対見えません。第二火口はこの尾根の裏、鬼の隠れ里の反対側にあるので、同時に見ることはできないんです。新玉の池もずっと離れています。でも真澄は、こういうふうに見せたかったんでしょうね。まるでCGみたいな手法で、寒風山という山の全体像をわたくしたちに理解してもらうために。これはとてもわかりやすく、すごい絵だなと思います。

鬼の隠れ里を初めて見たのは随分前になりますが、その時には人工的に積み上げたように見え、鬼が積み上げてここに隠れ住んだといわれているのが頷けました。でも、火山学者の方たちにいわせればこれも火山地形のひとつで、地下から粘りけの強い溶岩が地上に押し上げられて塔のようになったものが、ガラガラと崩れてできた、ということになります。

こうした地形を火山岩尖、スパインがんせんといい、岩の面と面を合わせるとひとつになる、もとの岩の形になるそうです。この岩山を調べた秋田大学教授の林信太郎先生は、真澄の絵の岩の数と、実際の岩の数はほとんど変わらないと言っています。

ここの岩のひとつに弘法の硯石といって、表面の窪みに水



(図絵3)『男鹿の秋風』椿の浦

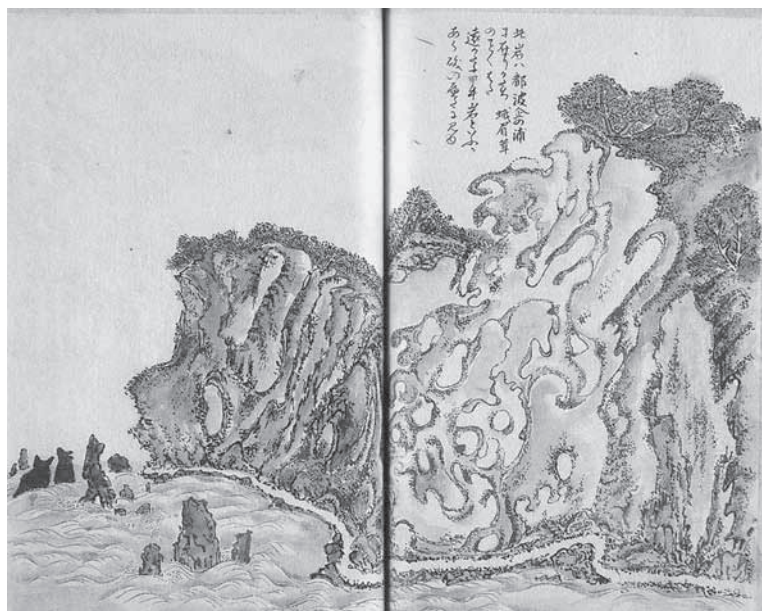
のたまった岩があります。真澄はこれもちゃんと描いているんです。硯石は日照りの時にも枯れることがないといわれていて、わたくしはこれまで鬼の隠れ里には十回以上行っているんですが、本当にいつも水がたまっているんです。不思議ですね。

後掲②、写真

これが展望台から見た第一火口と第二火口。大噴火口ともいう第一火口は、広い野原のように見えますけども、この妻恋峠火口という小さな火口から流れた溶岩に覆われているんです。溶岩堤防や溶岩じわというシワシワの地形がつくられています。それにしても真澄の絵はいいですね。こうやって展望台に登らなくても、一枚で寒風山の重要なところが全部見られるのですから。

次は南海岸に行きましょう。男鹿では南磯といいますが、真澄はこの南磯の海岸風景を『男鹿の秋風』という日記にたくさんスケッチしています。

これは「椿の浦」(図絵3)、今の椿漁港を描いています。真ん中にこんもりとした岡があるんですけどもこれが椿山です。ヤブツバキの自生北限地帯として国の天然記念物に指定されています。真澄がこの絵の中で一番描きたかったのは、椿山と思いますけども、もうひとつ重要なものがあって、それが「椿の白岩」といわれている白い凝灰岩です(矢印)。



(図絵4) 『男鹿の秋風』 樅の白岩

凝灰岩は、火山灰や火山礫^{れき}、礫^{れき}というの角ばった岩石の破片のことですが、そうした火山の噴出物が固まってできた岩石です。それがここに露出しているんです。

菅江真澄の絵というのは面白いですよ。こういうふうに関連で描きますよね(図絵3)。この中で一番重要で人に見せたいものを、次のページをめくるとこうしてアップにするんです(図絵4)。映画技法のような引きの構図とクローズアップの構図、それを効果的に組み合わせたこうした手法を日記のところどころで使っています。

真澄は白岩をアップで描いた図絵の説明文に「この岩は樅の浦にあつて、形は舞茸のようだ」と書いています。岩は風化作用によって表面が削られ凹凸になっています。地質用語でタフォニといいますが、皆さんはこれが舞茸のように見えるでしょうか。現代の子どもたちには、舞茸よりもアイスクリームをスプーンで削ったみたい、と言ったほうがわかりやすいようです。

樅の白岩のすぐ近くの館山崎にも同じ凝灰岩の露頭があります。ただ、こちらは白ではなくて緑色をしていてグリーンタフと呼ばれています。緑がとても鮮やかきれいですね。タフは凝灰岩という意味で、館山崎はグリーンタフという名称の発祥の地といわれているんですが、日本海側ではここだけ

でなく各地で見られます。去年、山陰ジオパークの視察で京都府の日本海側、鳴き砂で有名な琴引浜に行きましたら、そこでも大変きれいなグリーンタフを見ました。

この絵を見るとまわりは岩浜、海が広がっていて何もありませんけれども、今は埋め立てられて港がつくられ、真澄の時代と大きく変わってしまいました。私事になりますが、実はわたしはこの椿という漁村で生まれ、少年時代を過ごしたんですけれども、子どものころはこの辺りは海だったので、グリーンタフのところまで日常的には行かなかったという覚えがあります。ただ、夏休み期間などに浜辺で遊んでいると、ハンマーを持った秋田大学鉱山学部、今は工学資源学部と名前を変えましたけれども、その学生たちや研究者らしき一団がよくやってきました。わたくしは子どもながら、何となく知的興奮といえますか、ワクワクして、何をやっているんだろうと思つて後をつけていって、岩石を採取する学生たちの様子をよく眺めていました。あとで自分の家からカナヅチを持ち出して岩をたたいて、いっぱいしの地質学者になった気分です。遊んでいたんですけれども。

絵の左端のほうに黒い岩が見えますけれども、真澄は「べご岩」と書いています。「べご」というのは牛ですね。こうしてツノがあつて「べご」に見えるんですけれども、今はこ

が欠けてしまいました。海のすぐそばにあるこうした岩や崖は落石も多く、潮風や波の影響を受け長い時間をかけて地形が変わっていきます。この岩も昭和の初めころは頭部があつて「観音岩」と呼ばれていたのですけれども、それが欠け落ちて今は「ろうそく岩」と呼ばれています。

グリーンタフは雨の日や嵐の時に雨水や潮風が吹き付けると、もつときれいに緑色が出てくるんですよ。椿の白岩も陽が照つているとこのように白く輝いて見えるんですけれども、曇りとか雨の日に行くと、ちょっとダークグリーンというかが緑色がかつて見えます。真澄も「雨と潮に濡れてその色は青ばみ、異様に見えた」と書いています。

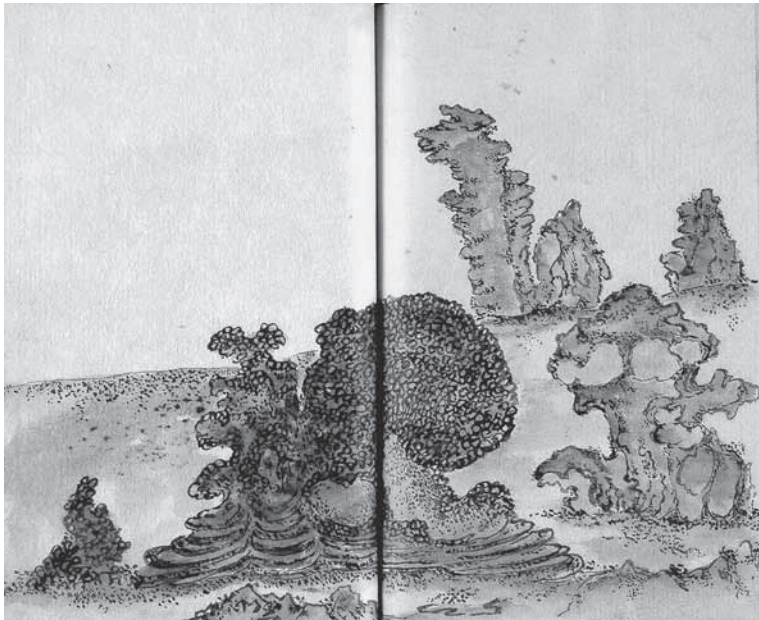
館山崎の凝灰岩は天候や光の具合によつて色が変わるのがいいな、と身近に見ることができる地元人であるわたくしは思います。普通は海岸の地層を観察するには晴れや曇りの日が適しているのですが、ここだけは雨の日の観察もおすすめてできます。車から降りればすぐ見られますので、南磯に行ったら、是非立ち寄つていただきたいところです。

館山崎から磯伝いに歩いて行くと、門前の手前に潮瀬崎というところがあります。いつ行つても大勢の釣り人が糸をたれていて、海釣りをされる方は、よくご存じの場所だと思いますが、ジオに関することでは、一番の話題はゴジラ岩

です。この岩が知られるようになってからまだ十数年しか経っていないんですが、今ではすっかり人気者になりました。真澄は潮瀬崎の絵を数枚描いているので、その絵の中にゴジラ岩がないか探したんですが、結局見つけれませんでした。考えてみれば、真澄はゴジラを知っているわけはないんですね。今わたくしたちがゴジラと呼んでいる岩は真澄には全く違う形の岩に見えたかもしれません。真澄がゴジラ岩を描いていたら、大変な話題になって真澄の知名度も一挙にあがったのにな、と思ったりするんですけども。

この絵(図絵5)は潮瀬崎の岩石の特徴をととてもよく描いています。角張った礫がいっぱい入っていて、ゴツゴツした岩肌をしています。年代的には今からおおよそ三五〇〇万年前から三〇〇〇万年前、まだ日本列島がユーラシア大陸の縁にくっついていたころの火山噴出物による岩石です。これが潮瀬崎全体に広がっていて、ゴジラ岩をはじめとして、カメ岩やガメラ岩など、いろんな形状の岩石を形づくっています。ここはまるで自然の彫刻美術館のようですね。

潮瀬崎にはほかにもジオ的に興味深いものが見られます。これは最近、津波で運ばれた岩、津波石の可能性があるととして、白石建雄先生が発表してから非常に注目されている岩後編(3)写真です。この岩が乗っている下の岩盤とは、岩石の種類が違う



(図絵5)『男鹿の秋風』潮瀬の岬

ですね。昨年の東日本大震災の津波でも、このくらいの岩が動いています。

では、いつごろの地震で運ばれたのか、それははっきりわかっていませんが、白石先生は少なくとも二〇〇〇年以上前であろうとし、対岸の鳥海山の噴火で山なだれが起き、それが津波を引き起こしたということも考えられるとしていまます。山体崩壊による津波では、寛政四年（一七九二）に起こった九州の島原半島と肥後の「島原大変肥後迷惑」が有名ですね。北海道の渡島大島の噴火による寛保元年（一七四一）の津波でも、一五〇〇人以上亡くなっています。渡島大島の山体崩壊によるこの津波は、真澄の記録にも登場します。北海道に渡った翌年の寛政元年（一七八九）、津波で亡くなった父親の供養をする老女が語る五十年前の惨状を、日記『えみしのさえき』に書き留めているんです。

ところで、真澄は男鹿を何回訪れているのでしょうか。まず最初の訪問は、天明五年（一七八五）で三十二歳のころ。日記は残っていないんですが、そのころ持ち歩いていた『粉本稿』という写生帖に、男鹿の絵が数点描かれていっています。これがその一枚で、大棧橋の絵（後掲4 図絵）です。このころの真澄の絵はちよっと稚拙ですけど、わたくしはこの『粉本稿』の絵も味があつて好きなんです。大棧橋は男鹿の西海岸にある天然の

石橋で、およそ三五〇〇万年前の火山活動で噴出した溶岩が、長い時間をかけ浸食されてこんな風になったんでしょう。

ちよど舟で大棧橋を潜っていくところの絵です。皆さんのなかで大棧橋を潜ったことのある方、いらっしゃるでしょうか。先月（九月）に男鹿市で開催された東北ジオパークフォーラムで、日本ジオパーク委員会の中川和之委員が、真澄のこの絵を見て男鹿では二〇〇年以上前からジオツアーをやっていたんじゃないか、とおっしゃったんですけども、その通りだと思います。すでにこのころから男鹿は観光地、行楽地であつて、ジオツアーを旅行商品化していたんですね。真澄もこうやって舟に乗つて、西海岸のジオクルーズ、島めぐりに出かけたんでしょう。

真澄は第一回目の男鹿訪問から二十五年後の文化元年（一八〇四）に、再び男鹿を訪れ『男鹿の秋風』という日記を著します。その六年後、今度はおよそ一年かけて男鹿半島をぐるりとまわつて『男鹿の春風』『男鹿の鈴風』『男鹿の島風』『男鹿の寒風』を書き上げるんですが、この五つの日記をまとめて『男鹿五風』と呼び習わしているのは、みなさんもご存じかと思います。

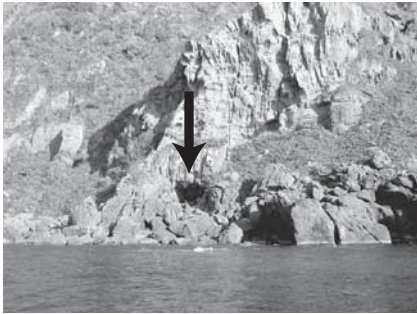
三回目の男鹿訪問は、訪れたというより、滞在していた、一年住んでいたといったほうがよいかと思うんですが、この

時も丸木舟で戸賀の塩戸から加茂青砂經由で門前まで、西海岸の島めぐりをしています。その舟旅で描いた絵は二十八枚にも及び、岩島、滝、洞窟など、まさに男鹿半島を代表するジオの風景が描かれていきます。

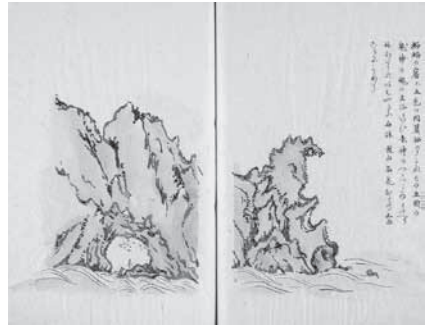
これはそのうちのひとつ、蝙蝠の窟です（図絵6）。西海岸には孔雀の窟やカンカネ洞など、こうした海食洞窟が十カ所以上あるといわれています。絵を見ると、舟が洞窟の中に入っています。ところが今の蝙蝠の窟（写真1）を見ると、洞門（矢印）が海面よりかなり高くなっています。これでは舟は入れません。昭和十四年（一九三九）の男鹿地震で西海岸は最大四十二センチ隆起したという調査研究が発表されています。すけれども、真澄の絵と写真を比べてみると、もっと隆起しているように見えますね。

これは竜ヶ島という島ですけれども、これも昭和十四年の地震で頭部が欠け落ちて、それ以前の竜が天に昇っていくようだといわれた迫力がなくなっていました。ジオの観点からあらためて真澄の記録、絵を見ると、地震など自然災害の研究材料としても有用だということが、これでわかると思います。

次にこの写真を見てください。後掲の5、写真この茶色の道のように見えるのは何だと思えますか。これは地下から上ってきたマグマ



（写真1）蝙蝠の窟



（図絵6）『男鹿の島風』蝙蝠の窟

が途中で冷えて固まった玄武岩の岩脈です。鬼が俵をころがして歩いていったように見えるので「鬼の俵ころがし」と言っています。まわりの白っぽい岩肌は花崗岩で、およそ九〇〇万年前のものといわれています。男鹿で見られる一番古い岩石ですね。岩脈はおよそ二〇〇〇万年前にこの花崗岩を割ってきたといえますから、ずっと新しいものです。

「鬼の俵ころがし」のような地形伝説は全国各地にあります。男鹿半島は鬼とからめた話が特に多いんです。寒風山のところで紹介した「鬼の隠れ里」をはじめ、「鬼の投石」、「鬼の足跡」、「鬼の腰掛石」、「鬼がつくった九九九の石段」などたくさんあります。男鹿は「なまはげ」の本場ということもあって、鬼が身近に感じられるのでしよう、人間の力の及ばない自然現象や不思議な地形などを鬼の仕業としたんでしょうね。

ここで菅江真澄と「男鹿半島・大瀧ジオパーク」の話のしめくりとして、最後に「なまはげ」に登場してもらいます。これはみなさんも何度かご覧になったことがあるかと思いますが、真澄が描いたなまはげの絵後掲6、図絵です。なまはげの記録としては最も古いもので、国の重要文化財に指定される際に、大変重要な決め手になったともいわれています。男鹿の大地で受け継がれてきた歴史や文化、連綿と引き継がれてきたな

まはげという民俗行事、必ずしも岩石や地層、地形だけがジオではなくて、こうしたものもジオパークを構成する大切な要素のひとつなわけです。

三、菅江真澄と八峰白神ジオパーク

続いて八峰白神ジオパークに話を移します。

菅江真澄が初めて秋田に来た時は、秋田領内に一年くらい留まっただけで、津軽に抜けてしまいます。久保田から北上して男鹿、能代、八森を通って岩館から藩境を越えて津軽に入り、深浦の方へ行きました。今の八峰町の海岸沿いを通っていくんですけども、その時の記録、日記は残っていません。で、その十六年後にどういわけか真澄は秋田に戻ってくるんですね。出て行った時と同じ道を逆ルートで、また藩境を越えて秋田、八峰に入ります。この時は岩館でハタハタ漁を見たりしてから能代を通して久保田へ行くんですけども、その後は今の県北部を中心に旅を続けます。主に能代を拠点にしたので、八峰は真澄のテリトリーといえますか、歩きやすいところだったのでしよう、日記をたどると、最低四回は足を運んでいるのがわかります。

これは再び秋田に入ってきて最初の日記『雪の道奥雪の出羽路』の、椿の浦を描いた絵後掲7、図絵です。椿といたら、さきほど

の男鹿の南磯の話ではないか、と思われるかもしれませんが、実は八峰にも椿という地名があるんです。男鹿の椿と同じでヤブツバキの群落があったことで椿の名がつけました。男鹿よりも北にあったんですが、近くにあった発盛鉱山の煙害などで、今は群落が見られなくなったようです。

この海岸には菅江真澄の案内板があるんですけども、最近になってジオパークの大きな案内板も建てられました。ここは今、八峰白神ジオパークのジオサイトのひとつとして、とても注目されているんです。なぜかというところ、このような柱状節理（写真2）が見られるからです。

わたくしがこれを初めて見たのはわずか五年前です。八峰町の生涯学習の集まりで真澄の足跡について話をする事になって、この辺を調査した時に気づきました。それまでも何か椿を通っていたのに、全くわからなかったんですね。誰も教えてくれなかったし、わたくしが目にした限り、町の観光パンフ、それから町史、郷土資料、そうしたものにも載っていないからです。それで、その時は八峰町はこんなに素晴らしい観光遺産、自然遺産があるのにもったいないなあ、と思いました。日本ジオパーク認定の気運が盛り上がるなかで、ようやくその価値が知れ渡って、案内板を立てて紹介するようになったんですね。

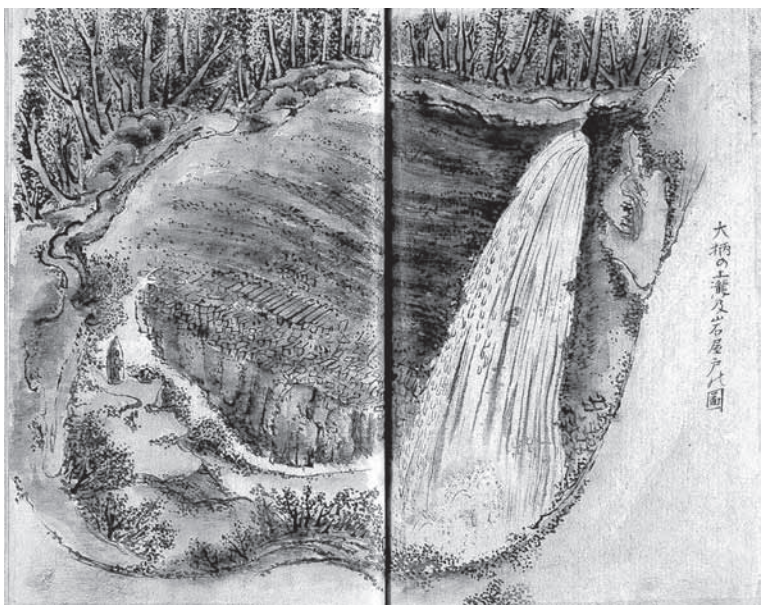


（写真2）八峰町椿海岸の柱状節理

溶けていたマグマ―溶岩が地上で急に冷えて体積が減少すると、そのときに収縮して亀裂が生じます。これが節理です。節理の面が規則正しい五角柱、六角柱などの柱状になることからそう呼ばれているんですが、この現象はそれほど珍しいものではなくて、日本全国、世界各地で見られます。北アイランドのジャイアンツコーズウェイのように世界自然遺産になっているところもあります。日本では福井県の東尋坊、兵庫県の玄武洞なんかが有名ですね。

ただ、真澄は残念なことに椿海岸の柱状節理は描いていません。雪の降る季節だったこともあって、岩場に下りたりせず足早に通り過ぎたからでしょう。でも、その時もしこれを見たら、真澄のことですから、きっと何らかの記録を残していたと思います。真澄の日記には、旅をした各処で目にした柱状節理の絵がたくさんあるからです。

これは下北半島の今の大間町にある柱状節理の海岸を描いた絵です。^{後掲8 図巻} 図巻の説明文に「材木石」と書いているんですけども、ほんとに材木を積み重ねたように見えるんですね。真澄はこの石で屋根を葺いたり石垣にしたりしていると記録しています。石垣には今も使われていて、わたくしも実際に見たことがあります。それから、これは白神山地の南山麓、今の藤里町の太良峡にあるデイサイトの柱状節理で、地元で



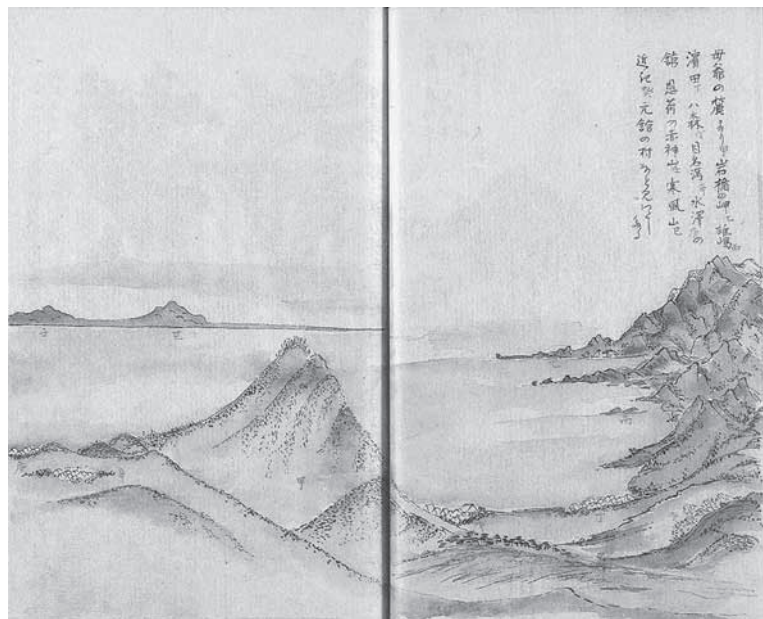
(図巻7) 『おがらの滝』 大柄の上滝

は笠石といっています。わたくしがこれを見たのは、もう二十年ほど前になるでしょうか。藤里駒ヶ岳の登山口へ行く途中にあったと記憶しています。これは八峰町の隣の能代市にある「大柄おがらの滝」の絵(図絵7)ですが、真澄が「岩屋はとても広くて千人ほど隠られそうだ」と誇張して書いている滝の岩壁が、よく見ると柱状節理ですね。滝ではほかに鹿角市の銚子の滝を描いた絵でも、見事な柱状節理を描いています。

秋田の柱状節理を描いた真澄の絵を携えて、秋田のジオサイトをめぐるしてみるのも楽しいんじゃないでしょうか。

次にこの絵をご覧になってください(図絵8)。これは母谷山やさんの麓あたりから魚眼レンズを使ったパノラマ写真のように日本海の海岸線を描いたものです。このようなランドスケープは真澄の得意とするところなんですけども、真澄はこうした技法をどこで修得したのか、大変興味深いといえますか、重要なことなんですけど、これについては別の機会にあらためてお話しすることにして、今回はジオ的な視点でこの絵を見てみたいと思います。

男鹿半島の赤神山―真山・本山と寒風山も遠くに描かれているんですが、右の山並みのほうを注目してください。手前から数えて四つの岬が伸びていますが、それぞれが海岸に向



(図絵8)『おがらの滝』母谷山麓からの眺望

かつて段々になっているのがわかるかと思えます。これは海岸段丘という地形です。

波が海岸を浸食して削りとられたところに砂や泥がたまつて、その後そこが隆起するか、海面が後退するかして平らな台地、段丘面が現れます。そこがさらに浸食を受け、そしてまた新しい段丘面が現れて……というのを繰り返します。つまり浸食と隆起の繰り返しでこのような段々ができるんですね。八峰町はこの海岸段丘がとてもよく発達していて、目に見えるだけで六段もの段丘を確認できます。

真澄の絵を見ると奥の方の段々が手前より高く見えませんか。隆起した平らな段丘面は、もともと海底にあった部分なので同じ段丘であれば陸地になっても高さは変わらないはずですが、今、実際にここを撮った写真を見ても、このように見えます。それは、八峰町では青森県寄りのほう、つまり北に進むほど土地が隆起していることを意味しているんですね。

真澄が段丘のでき方を理解していたのかどうか、そもそも当時、段丘ということばがあったのかどうか……。ただ、真澄がこのような絵を描くことができたのは、風景を山水として鑑賞するだけでなく、地形として捉える自然科学者の眼を持合わせていたからこそではないか、そんなふうに思

います。

四、菅江真澄とゆざわジオパーク

次はゆざわジオパークです。八峰と男鹿半島は日本海に面しています。八峰は白神山地、男鹿半島は寒風山が主要なジオサイトではあるんですけど、全体的には海のジオ、岩石や火山のジオなんですね。一方、湯沢は気候風土も異なる秋田県南部の内陸部にあって、この二つと比べると、ちょっと趣が異なるジオパークです。異色といってもいいかもしれません。

きょうもしここにゆざわジオパークの関係者がいらっしやったら怒られるかもしれないですが、湯沢市が日本ジオパークに名乗りをあげると聞いたときに、湯沢はジオー地層や地質や岩石など、いわゆる地質遺産に関しては特別重要な場所じゃないし見どころもないので、大丈夫なんだろうか、と思ったりしました。ところがですね、湯沢のみなさんのジオパークにかけるやる気度といえますか、地域あげての盛り上がり、意気込みは相当なもので、現にこうして日本ジオパークに認定されたわけです。

このパンフレットを見ると、「美の郷ゆざわ」というキャッチコピーで市内を十六カ所のジオサイト候補地に分け、その

中でまた細かくジオスポットをあげています。自分たちの住んでいるところの宝物、それを地元に住んでらっしゃる方たちが一生懸命探すことによつて、湯沢には素敵な宝物が埋まっていることがわかつたんですね。ジオパークの取り組みは合併した四つの市町村をまとめるための施策、地域起こしとしても成功したという感じがします。

当初、ジオスポットに小野小町の遺跡や岩崎の鹿島様があげられていることに、地層の博物館のような男鹿半島でジオの洗礼を受けたわたくしのような者は、ちよつと違うんじゃないかと思つたんですけども、なまはげがジオなら、鹿島様も当然ジオの所産なんですね。

菅江真澄が今の湯沢市、雄勝郡一帯をめぐつたのは六十歳を過ぎたころですが、そのちよつと前に秋田領内の地誌を編纂したいといつて、秋田藩にお伺いをたてます。ですが、すんなり許可がおりませんでした。それでも雄勝郡のほうへ行つて、『勝地臨毫』^{しょうちりんごう}という図絵集、それから雄勝郡の地誌の下書きみたいなものを書いたりしました。それには、今のゆざわジオパークに関連する興味深い絵がたくさん載っています。地誌編纂の許可が藩から正式に下りたのは、その十年後のことですが、すんなり地誌の編纂が許可されていれば、『勝地臨毫』や現在残されている平鹿郡と仙北郡の地誌は、

随分違うものになつていたように思います。

これは『勝地臨毫』の桁倉沼の絵です（図絵9）。湯沢市の東南部、岩手県との県境に近い木地山高原のあたりを描いています。今からおよそ七〇〇万年から五〇〇万年前、このあたりは火山活動が盛んで、噴火が起つた後にその中心部が陥没してカルデラ湖ができましたといひます。わたくしはゆざわジオパークのパンフレットを読んで、木地山高原一帯が大きなカルデラだったことを初めて知りました。ただ、桁倉沼など木地山高原の沼はだいぶ後になつてからの地殻変動や地すべりでできたようです。



(図絵9) 『勝地臨毫雄勝郡四』 桁倉沼

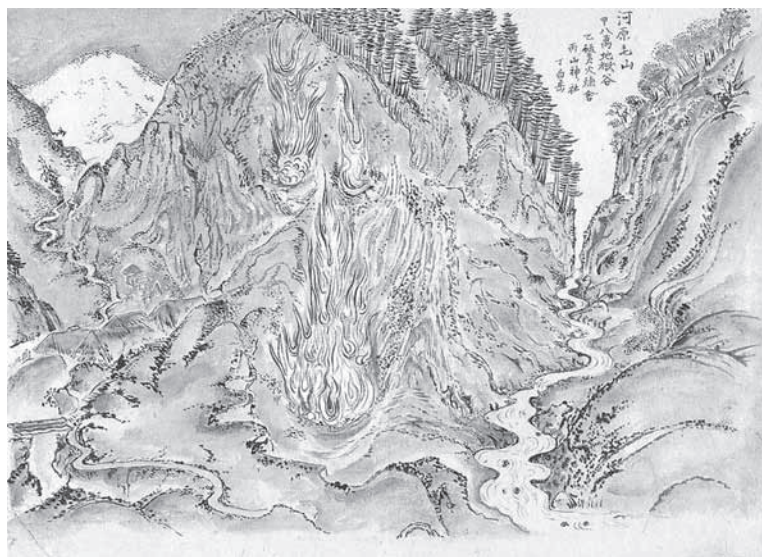


(図絵 10) 『勝地臨毫雄勝郡六』兜山

それからこの絵、とても好きなんですけども、木地山高原の田螺沼付近からの眺望図です(図絵10)。左上に見えるのは兜山かぶとやまという火山です。溶岩が盛り上がったような特徴的な山の形をしているので、溶岩ドームかとも思ったのですが、そうではないようです。それと、この山も柱状節理で形づくられているんですね。

実はこの絵でとても不思議だなと思うことがあります。絵の一番奥まったところにある乙と丙の記号をよく見てください。絵の説明文では「乙陸奥津軽ノ岩木嶽 丙同国の小田山」とあります。つまり、青森の岩木山と八甲田山のことなんです。果たして湯沢の木地山からこの二つの山が見えるんでしょうか。直線距離にして二〇〇キロ以上ありますし、あの位置に並んで見えるとは考えられないので、真澄の勘違いではないかと思うのですが。

これは三途川溪谷というところ後編の10-図絵6です。三つの沢(川)が合流するところなので三津川と言っていたのを、この先に川原毛地獄があるので、冥土に行く途中に渡る三途川と呼ぶようになったらしいです。今は橋が架かっていますけども、昔はこの溪谷のつづらおりの道をいったん川岸まで下り、また上っていきました。ここもゆざわジオパークのジオサイトのひとつです。三途川層という地層の露頭が見られます。



(図絵 11) 『勝地臨毫勝郡六』川原毛山

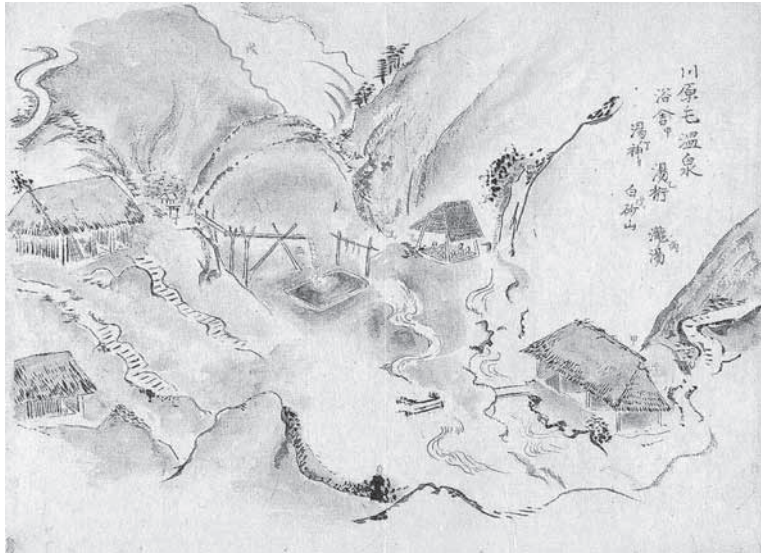
真澄はこの三途川から川原毛地獄を通過して泥湯温泉に至る旅を、『高松日記』として書き残しています。これはその時に訪れた大湯滝です。後編(白) 図巻みなさんのなかには、ここに行っただ方がいらっしやるかもしれませんね。滝がそのまま天然温泉という、秘湯ファンには全国的に知られているところですよ。

もともとはこの絵のように一条で落ちていましたが、今は二条に分かれて落ちていきます。上流から木流しをしていたそうで、明治のころに滝口に木が引っかかって岩が欠け、流れが二手に分かれてしまったということです。

真澄が来た時はケラ蓑を着た行者のような湯治客が病を治すため湯滝に打たれていました。真澄が今ここに来たら、カラフルな水着を着て、病人でもないのに滝に打たれ、滝壺に入っている人を見たらびっくりするでしょうね。

次の絵は川原毛山、川原毛地獄です(図絵11)。荒涼とした山肌から硫黄がすごい勢いで吹き出ているのがわかりますね。かつては青森の恐山や富山の立山とともに、日本三大霊地のひとつに数えられたといいますが、今は絵のように炎が立ち上るような光景はみられません。ただ、硫化水素ガスはとても危険なので、むやみに遊歩道以外の場所へは立ち入らないようにという看板が出ています。

ここはもともと硫黄鉱山でした。昭和四十年代のはじめま



(図絵 12) 『勝地臨毫雄勝郡六』川原毛温泉

では硫黄が採掘されていましたが土砂崩れで亡くなった人が出たりして閉鎖になりました。この場所は浄土長根といって、真澄はここにあった鉱夫の宿舎に一夜の宿を借りています。天保の飢饉の時に南部領からここまで難民が逃れてきて、たくさんの方が亡くなったそうです。鉱山で亡くなった人も含めて、その供養塔やお地藏さんがここに立っています。

川原毛山には大湯滝のほかに川原毛温泉もあつたんですけども、雪害で昭和十年代初めに廃湯になりました。

真澄が訪ねた時の川原毛温泉の絵を見てください(図絵 12)。当時の湯治場の形態をよく表しています。ちよつと分かりにくいと思いますが、浴舎があつて湯船に湯治客が数人入っています。ここが源泉です。真ん中辺に湯滝があります。樋から湯を落として痛むところ、患部をマッサージします。宿舎二棟、湯治客が泊まる場所ですね。そしてここが湯守の家で、湯の神が祀られている祠ほこらもあります。こうした東北の湯治場では、必ず湯の神様、仏様を祀った祠とか小さな神社があつて、薬師さんを祀っているところが多いです。

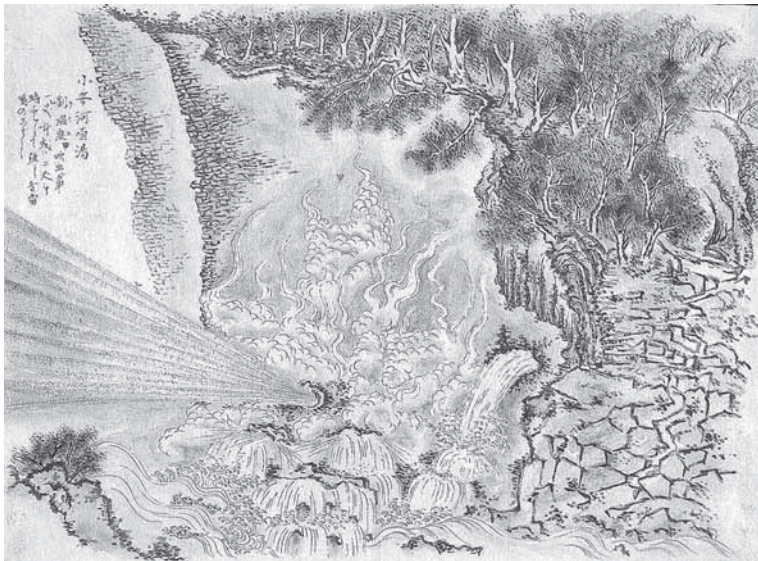
湯船、湯滝、湯小屋、湯の神、これが当時の温泉の四点セットですね。湯治場の原型というのがここに描かれていると思うんですけども。

木地山高原から栗駒山にかけて湯沢市の東南部一帯は古くか

ら温泉の宝庫で、この川原毛をはじめ、泥湯、とちゆ 橡湯、おやす 小安、大湯、須川などの温泉が湯治客を集めていました。真澄はこれらの温泉の発見の由来や泉質、宿舎や湯治客のようすを詳細に記録しています。ゆざわジオパークでは温泉も、もちろんジオサイトに組み入れられているので、湯治場の形態、東北の温泉の基本的な形態を知るうえでとても参考になる真澄の絵は、これからもっと注目されるかもしれませんね。

これはみなさんもよくご存じの小安峡の大噴湯です。真澄は「小安河原湯の割湯」と題して迫力ある絵を描いています（図絵13）。説明文には「時として強し、音雷鳴のごとし」とありますが、これを見ると今よりも噴湯の勢いがあるような気がします。峡谷の両側の崖には三途川層が露出していて、その岩の割れ目から熱気と蒸気が噴き出しているわけです。これこそ、ゆざわジオパークならではのジオの風景ですね。

小安峡からもっと下流に行くと、こういうふうには泥岩と砂岩が互い違いに積み重なった地層、こせう 互層といいますが、それはつきり見えません。後掲(12)写真 男鹿半島でも生鼻崎でもっと大規模なものが見られますが、こうした互層が皆瀬川の兩岸にずっと続いているんですね。わたくしはこれまで小安峡など皆瀬川の上流部に幾度となく行っていきますけども、今のようにジオ



(図絵 13) 『勝地臨毫雄勝郡四』 小安河原湯

に関心を抱かなければ、こうして三途川層の互層の写真などわざわざ撮ることもなかったでしょう。

三途川層は砂や泥や火山灰が堆積した地層ですが、面白いのはその中で植物化石がたくさん見られることです。化石は三途川化石資料室というところに展示しています(写真3)。



(写真3) 三途川植物化石 (三途川化石資料室)

押切伸二さんという地学の先生のコレクションです。押切さんが集めたブナやカエデ、シナノキなど落葉樹の葉の化石、それから珍しい昆虫化石もあります。その数はすごいですが、よくこれだけ集めたものだと思います。今のところ、あらかじめ連絡しておかなければ見られないのが残念です。ここは常時開けておいてほしいですね。

こうした植物化石、実は真澄も記録しているんですよ。場所は湯沢ではなくて、今の北秋田市、森吉山ダムの奥の小又川上流部にある白糸の滝付近で、『雪の秋田根』という日記に絵が載っています(図絵14)。



(図絵 14) 『雪の秋田根』花紋石

説明文にある「花紋石」というのは、植物化石、木の葉石のことですが、真澄は硯石になるといこの石をどうしても手に入れたくて、真澄に雪をかき分けて白糸の滝まで行ったんですけども、結局手に入れることはできませんでした。ですから、この絵はあとに別の場所で現物を見て描いたのかもしれない。

わたくしは旧森吉町で最後の木の葉硯の工人だった方の奥さんに話を聞いたことがあります。木の葉石は小又川の川岸や川底にある頁岩けつがんの中にあるそうですが、真澄も説明文に「この小又の白糸の滝で採れる石はみな硬い」と書いているように、すごく硬くて実際は硯にするには不向きで、つくるのに大変苦労したそうです。とはいっても、木の葉石の硯はジオグッズとしては最上級品ですね。真澄ならずとも、あったらわたくしも欲しくなります。

また湯沢の化石資料室の話に戻りますが、ここには植物や昆虫の化石のほかに、貝の化石も展示してあります。この写真は貝そのものではなく、岩に貝殻の跡を残している化石です。こうした化石を印象化石というんですが、日本列島がユーラシア大陸から離れて日本海ができたころ、一五〇〇万年から一三〇〇万年くらい前の、当時の海でできた地層にこうした貝の化石が挟まれているわけです。これを見たとき、わた

くしは男鹿にも同じものがあるな、と思って嬉しくなりました。

これは男鹿の西黒沢海岸で見られるホタテガイの仲間の印象化石後掲(1)写真です。これと同じものがゆざわジオパークで見られるということ、その当時湯沢も海だったということ。そんなところで男鹿と湯沢はつながっているんですね。

おわりに

こうして菅江真澄とジオパークという視点で真澄の記録、絵を見てみると、湯沢であれ、八峰であれ、男鹿であれ、風景の中に地形、地層の成り立ち、岩石の個々の表情などが読み取れるんですね。それに気づくと、今まで知らなかった真澄の別の面が姿を現してきます。それがとても面白い。わたくしは菅江真澄に出会ってからもう四十年以上になります。が、真澄という人は本当にいろんな顔を持っていて、引き出しがたくさんあって、全然飽きないんです。

これから真澄をキーパーソンにして、八峰白神、男鹿半島・大潟、ゆざわ、秋田県ならではのジオパークの繋がりが、ネットワークを形づくることのできるのではないか。ほかのジオパークでは、真澄のような存在は探してもいませんから。真澄をジオパークの中に取り込んでジオツアーを企画したり、

相互交流したり、ジオグッズ、ジオフードなどの商品開発をしたり、いろいろな考えられるんじゃないかと思います。真澄はジオパークのメディア、媒体になり得るんですね。

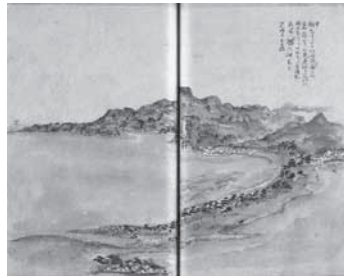
普段見過ごしているものや気がつかないでいるものの中に、とても大切なものや自分を豊かにしてくれるものがある。それがちょっととした角度の違いや光線のあてぐあいや姿を現わす時があつて、それを見つげるためのヒントや方法を菅江真澄は教えてくれるということを、わたくしはジオの視点から真澄の記録を見ることによって、また改めて感じる事ができたように思います。

ジオパークに限らず、みなさんも真澄の新たな一面を自分なりに見つけて楽しんでみてはいかがでしょうか。勝手なことばかり述べてしまいました、ちょうど時間になりました。これで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

※本稿は平成二十四年十月六日の講堂における講演内容を通読しやすいように編集し、加筆したものです。

※編集上、本文附図として紹介できなかつた真澄の図絵及び写真を、次にまとめて紹介します。(所蔵者名のない図絵は館蔵写本)

(1) 『男鹿の秋風』 鯨長根



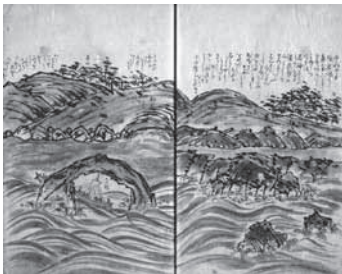
(3) 津波石と思われる潮瀬崎の岩塊

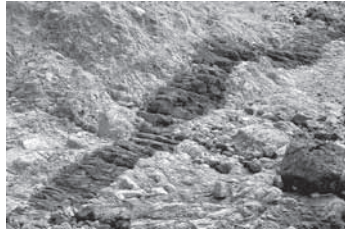


(2) 寒風山の第一火口と第二火口

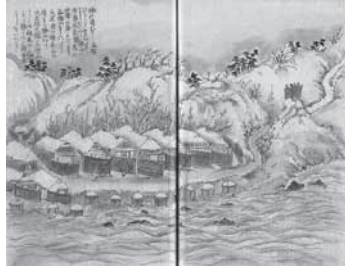


(4) 『粉本橋』 大棧橋
(大館市立中央図書館蔵)





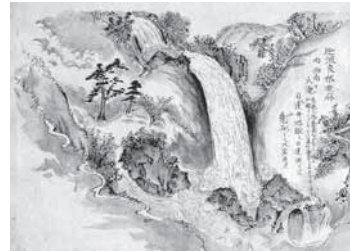
(5) 鬼の俵ころがしの岩脈



(7) 『雪の道奥雪の出羽路』 樁の浦



(9) 『しげき山本』 笠石



(11) 『勝地臨毫雄勝郡六』 大湯滝



(6) 『男鹿の寒風』 なまはげ



(8) 『奥の浦々』 材木石



(10) 『勝地臨毫雄勝郡六』 三途川溪谷



(12) 皆瀬川の三途川層



(14) 貝の印象化石 (西黒沢海岸)



(13) 貝の印象化石 (三途川化石資料室)

真澄研究 十七号

平成二十五年三月二十九日発行

編集・発行 秋田県立博物館

菅江真澄資料センター

〒〇一〇〇二三四

秋田市金足鳩崎字後山五二

(株)塚田美術印刷

〒〇一〇〇九二二

秋田市大町一丁目六一六

印刷